

岩手県文化財調査報告 第96集

平泉遺跡群範囲確認調査報告書

—— 第42次柳之御所跡発掘調査報告書 ——

平成6年3月

岩手県教育委員会

岩手県文化財調査報告 第96集

平泉遺跡群範囲確認調査報告書

—— 第42次柳之御所跡発掘調査報告書 ——

平成6年3月

岩手県教育委員会



序 文

平泉町に所在する柳之御所跡は、昭和44年から62年まで部分的な調査が行われておりましたが、昭和63年より北上川遊水地計画および平泉バイパス建設事業に先立ち、その事業地域内の発掘調査を（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターと平泉町教育委員会が建設省の委託をうけ実施してまいりました。

発掘調査が進むにつれ、大規模な堀、塀に囲まれた建物群や井戸跡、園池跡などの遺構や、多量のかわらけ、陶磁器、多種多様な木製品や金属製の遺物が発見されました。このような状況に鑑み、岩手県教育委員会といたしましては、この遺跡の範囲を把握し、遺構分布の状況を確認し遺跡中心地域推定のための資料を得るための確認調査を実施することとし、平成4年度から今年度にかけて実施してまいりました。

調査の結果、昨年度の成果に引き続き多大な成果を挙げることができました。とりわけ遺跡中央部での大形建物跡とそれを区画するであろう塀跡の検出は、本遺跡の中心部分把握に重要な情報を提供するものと思われまます。

周知のように本遺跡に関しては、建設省の埋蔵文化財に対する大きなご英断によってその保存が計られることとなりました。今後、柳之御所跡のみならず平泉文化全体究明のためにも種々検討を重ねなければならない課題はありますが、本書がその一助となれば幸いです。

最後に、本確認調査の実施にあたり、ご指導・ご援助賜りました建設省東北地方建設局岩手工事事務所、文化庁記念物課、（財）岩手県文化振興事業団、平泉町教育委員会はじめ関係各位に対し、感謝申し上げます。

平成6年3月

岩手県教育委員会

教育長 千葉浩一

例 言

- 1、 本書は岩手県教育委員会が平成5年度に実施した平泉遺跡群範囲確認調査事業（柳之御所跡）にかかる発掘調査報告書である。なお、本事業は国庫補助金の交付を受けて実施したものである。
- 2、 発掘調査を実施した柳之御所跡については複数年次にわたり発掘調査が行われているが本調査は、そのうち第42次調査にあたるものである。
- 3、 遺構の略称は、掘立柱建物——S B、塀跡・柱列——S A、溝跡——S D、井戸跡——S E、土塙——S K、柱穴——Pの記号を用いている。遺構名の記載については、調査が複数年度・多数にわたるため、調査次数を最初に付してある。
- 4、 本事業にかかる発掘調査、整理作業は岩手県教育委員会事務局文化課長・山口敏の指示のもと、課長補佐・相原康二、主任文化財主査・小田野哲憲、文化財主査・熊谷常正、〃中村英俊が担当し、非常勤職員・小野寺泰憲の協力を得た。
- 5、 本調査で得られた記録および出土品は、岩手県教育委員会が保管している。

目 次

序 文

例 言

I 調査の概要

- 1 遺跡の位置と環境…………… 1
- 2 過去の調査と本調査の目的…………… 1
- 3 調査の方法…………… 5

II 検出された遺構と遺物

- 1 A地点の遺構と遺物…………… 6
- 2 B地点の遺構と遺物……………17
- 3 C地点の遺構と遺物……………21

III まとめ

図 版 目 次

- | | |
|---------------------------------|-------------------|
| 第1図 位置図(1)…………… 2 | 第16図 かわらけ(1) ……23 |
| 第2図 位置図(2)(1/50,000) …… 2 | 第17図 // (2) ……24 |
| 第3図 柳之御所跡全体図…………… 3 | 第18図 // (3) ……25 |
| 第4図 範囲確認調査発掘地点グリッド配置図…………… 4 | 第19図 // (4) ……26 |
| 第5図 A地点検出遺構平面図…………… 7 | 第20図 // (5) ……27 |
| 第6図 大形建物跡柱穴配置図…………… 8 | 第21図 // (6) ……28 |
| 第7図 大形建物柱穴平・断面図…………… 9 | 第22図 // (7) ……29 |
| 第8図 建物跡柱穴配置図……………10 | 第23図 // (8) ……30 |
| 第9図 土壌(42S K02)平・断面図……………11 | 第24図 // (9) ……31 |
| 第10図 井戸状遺構(42S E01)平・断面図……………12 | 第25図 国産陶器(1) ……32 |
| 第11図 大溝(42S D01)平・断面図……………14 | 第26図 // (2) ……33 |
| 第12図 整地層の範囲、断面観察トレンチ……………15 | 第27図 // (3) ……34 |
| 第13図 B地点検出遺構平面図……………18 | 第28図 中国産陶器器 …… 35 |
| 第14図 土壌(42S K01)平・断面図……………19 | |
| 第15図 C地点検出遺構平面図……………21 | |

写真図版目次

第1図版	A地点空中写真	39	第13図版	B地点遺構検出状況	51
第2図版	42S B 01検出状況	40	第14図版	かわらけ(1)	52
第3図版	42S B 01柱穴(1)	41	第15図版	〃(2)	53
第4図版	42S B 01柱穴(2)	42	第16図版	〃(3)	54
第5図版	井戸状遺構・土壙	43	第17図版	〃(4)	55
第6図版	土壙調査状況	44	第18図版	国産陶器(1)	56
第7図版	堀跡検出状況(1)	45	第19図版	〃(2)	57
第8図版	堀跡検出状況(2)	46	第20図版	〃(3)	58
第9図版	礫群及び土器溜まり	47	第21図版	〃(4)	59
第10図版	かわらけ出土状況	48	第22図版	〃(5)	60
第11図版	大溝検出状況	49	第23図版	国産陶器、中国陶磁	61
第12図版	A地点北部グリッド	50			

I 調査概要

1 遺跡の位置と環境

平泉町は岩手県の南部、北上盆地を形成する北上川中流域の南端に位置する。町域は束稲山（標高595m）をはじめとする北上山地西縁の山なみが東に連なり、北上川の低地帯を介し西側の奥羽山脈東縁に延びた丘陵群へと及ぶ。北上川沿いには、段丘群が発達するが、概して東側は少なく、西側に集中する。

柳之御所遺跡はこの北上川西岸の段丘群のうち中位の段丘に位置すると考えられる。標高は遺跡南東で22m、北西に向かうにつれ標高を増し、北西端では38mとなる。現地形から把握している遺跡の範囲は、この北西～南東に細長い段丘面全域に広がり、長さ約750m、最大幅約200m、面積約10万㎡である。遺跡の北東側は、北上川によって浸食を受け、比高約15mの急な崖となる。東側は北上川の氾濫原が広がり、かつては小規模な自然堤防上に畑地、後背部は水田が広がっていた。

遺跡の現況は、かつては畑地を点在する宅地や小規模な水田であったが、今回の調査地区の大半は北上川遊水地計画によって住民は移転し、荒れ地となっていた。

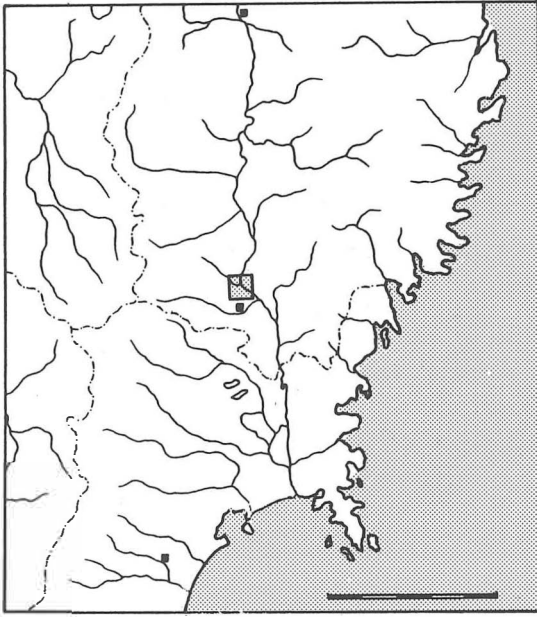
本遺跡の北西には高館跡が位置し、南西側には猫間ヶ淵遺跡の低地が平行して横たわり、その対岸に特別史跡無量光院跡が所在する。南東方向には平泉旧市街地の中に藤原秀衡の常の居所との伝えのある伽羅之御所跡が位置する。

これらの遺跡に接して、近辺には瓦窯跡を有する鈴沢遺跡、池跡・橋脚が検出された鈴沢之池跡が国道4号付近を中心に所在するほか、平泉町役場周辺の志羅山遺跡、藤原国衡・隆衡の居館跡との伝承があり、かつての発掘調査で建物跡等が確認された平泉小学校周辺、伽羅之御所跡南側の泉屋遺跡などが分布する。また、北西方向には花立I・II遺跡などが所在する。

これらの遺跡は、ほぼ2km四方の範囲におさまり、平安時代末期を主とする平泉遺跡群の中核地帯をなす。特別史跡中尊寺境内を中心とする遺跡群はこれらの北辺に、また特別史跡・特別名勝毛越寺や毛越遺跡などは西縁に位置している。

2 過去の調査と本調査の目的

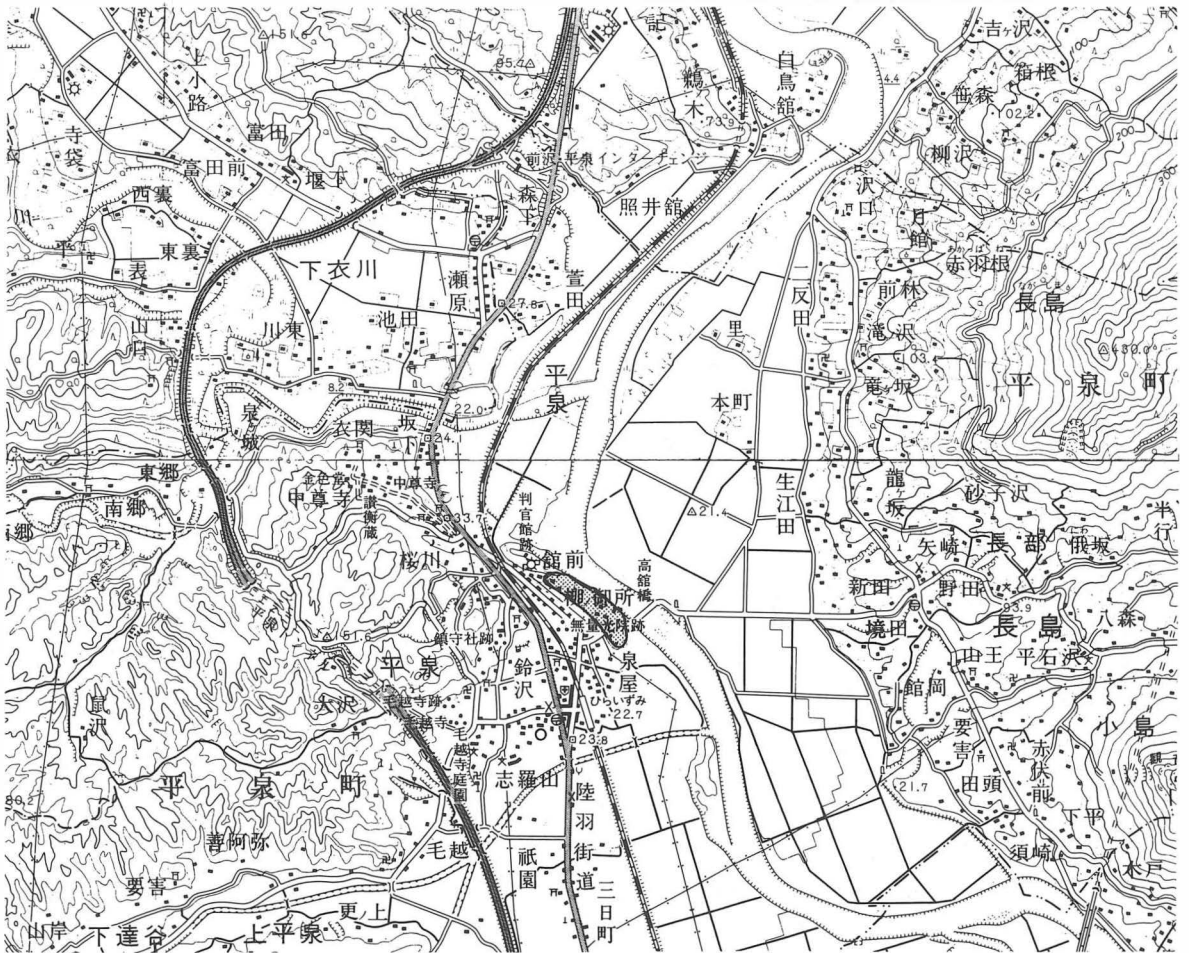
柳之御所跡の発掘調査は、藤島亥治郎東京大学名誉教授・板橋源岩手大学名誉教授らから構成される平泉遺跡調査会によって、昭和44年度から開始され、昭和47年度にいたる間に都合10次の調査が行われた。しかし、調査範囲が小規模であったこと、建物跡検出をその主目的としたことなどのため遺跡全体の構造究明には限界があった。さらに昭和57～59年度には、北上川遊水地計画・平泉バイパス計画に先立つ事前の範囲確認調査が平泉町教育委員会によって実施



第1図 位置図(1)

第2図 位置図(2)

(1/50,000 「水沢」「一関」「陸中大原」「千厩」図幅)

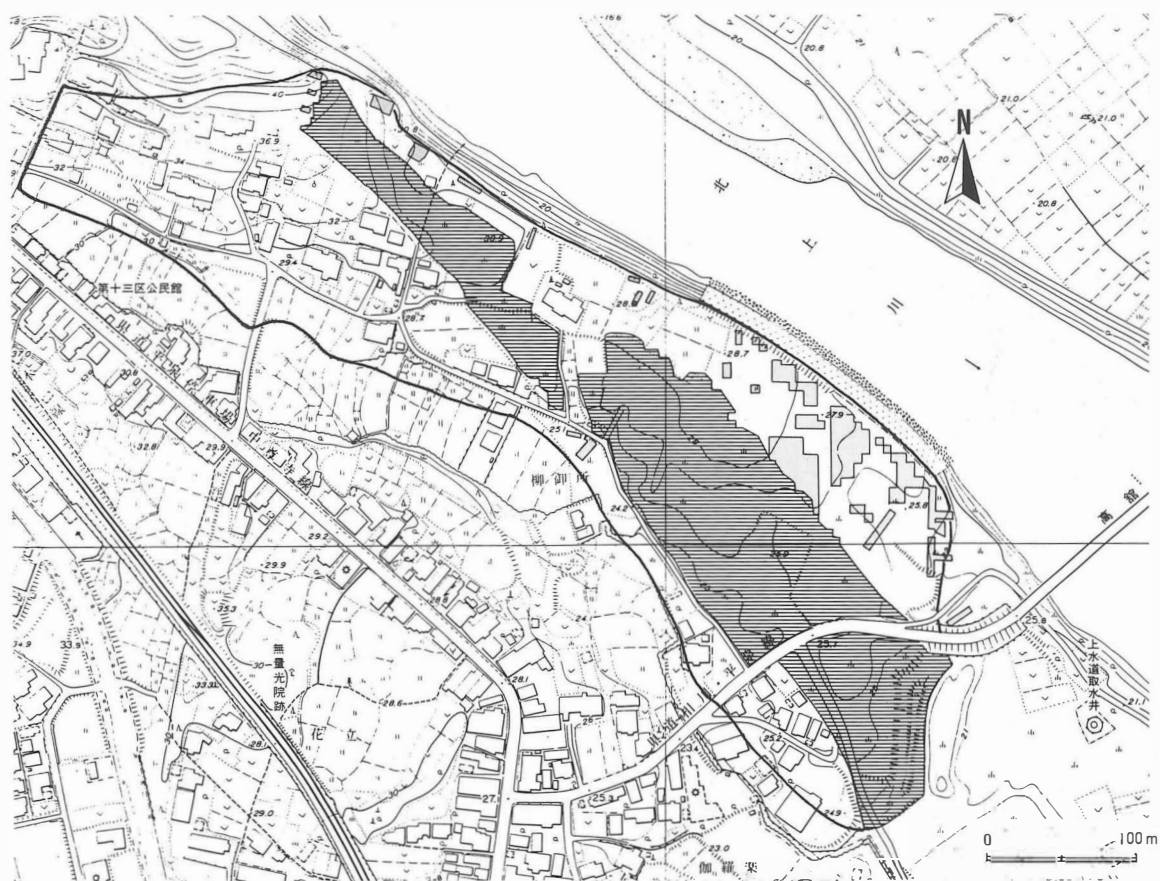


され、建物跡や一部分ながら堀跡も検出していた。

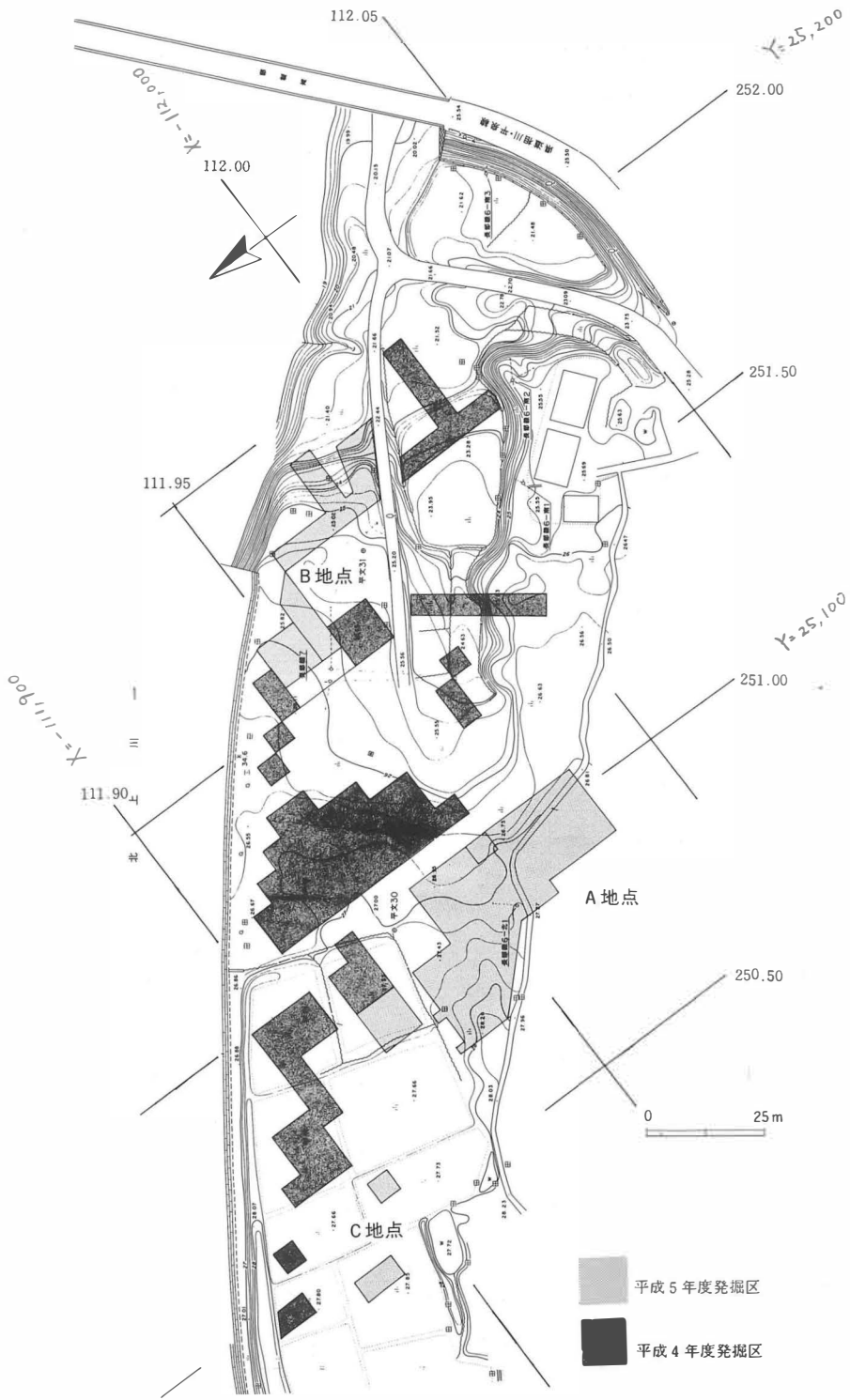
昭和63年度から建設省の委託を受け開始された北上川遊水地計画・平泉バイパス計画に係る（財）岩手県文化振興事業団と平泉町教育委員会による大規模な発掘調査によって、大規模な堀で区画された建物群・園池跡・井戸跡や堀の外側に広がる区画溝をもつ建物群などの複雑な遺構群、さらにおびただしい量のかわらけ、国産や中国製の優れた陶磁器類、多様な木製品や金属製品などの出土品は、古代史研究者のみならず、多くの人々の注目を集めるに至った。

また、遺跡の年代も、従来藤原清衡・基衡の居館跡と伝えられてきたが、出土遺物から平安時代の末、12世紀第三四半期を中心とする時期に該当する可能性が高くなり、藤原秀衡を中心とした平泉文化最隆盛期に営まれたことが明らかになりつつあった。

岩手県教育委員会では、この状況に鑑み、文化庁の指導のもと遺跡の範囲・中心地域推定の資料を得るため、平成3・4年度の二年次にわたり範囲確認調査を実施することとした。



第3図 柳之御所跡全体図



第4図 範囲確認調査発掘地点グリッド配置図

3 調査の方法

平成4年度の範囲確認調査（第37次調査）では、北上川寄りの地点を中心に遺構群がどこまで伸び残存しているか、北東側に堀の延長部が存在するか、さらに高館橋側の遺構残存状況確認等を目的に実施し、それぞれある程度の見通しが得られた。

特に、北上川沿いの擁壁工事によって幅約10mにわたり削平された地点があり、そこから内側に関しては遺構が確実に存在し、残存状況も比較的良好であることが確認できたのが大きな成果であった。

平成5年度の第42次調査では、まず平成2年度の（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター発掘区（第28次調査）で確認されていた園池北側の大形建物群が北への程度延びているのかを明らかにすべく、遺跡中央部分（A地点）を調査した。また、遺跡東部の高館橋寄りの段丘斜面から北上川に面する地点で、37次調査で確認した遺構群がどのような在り方を示すか確認するための調査も行った（B地点）。さらにA地点の西の休耕田部分に、どのような遺構が存在するかを確認するためグリッドを設置した（C地点）。

以上の調査区は、第37次調査に引き続き調査区全体を平面直角座標第X系に準拠した5×5mのメッシュによるグリッドを基本にして実施した（第4図）。

調査グリッドは、平成4年度に設置した二箇所の公共座標を基に設定している。

二箇所の公共座標は、平文30が $X = -111932.377\text{ m}$ ・ $Y = 25099.270\text{ m}$ 、平文31が $X = -111976.435\text{ m}$ ・ $Y = 25168.030\text{ m}$ である。この座標を基に調査区内にグリッドの基準となる杭を20m間隔で配置し、それを基準に小グリッドを配した。ただし遺構の検出状況や地形等の制約から、所によっては変更して発掘している箇所もある。

最終段階での発掘グリッドによる調査面積は約1,770 m^2 となり、平成4年度の調査実施面積2,060 m^2 より約290 m^2 減じている。

これは天候が不順だったこともあるが、次のような理由によるものである。

平成4年度の調査では範囲確認調査という性格上、遺構の内容確認調査をほとんど行わなかった。そのため、検出遺構それぞれの関係を整理・把握するのに苦慮した。従って、今回の第42次調査では、基本的には遺構の内容確認の精査を最小限にとどめたものの、将来の調査に余り影響のでない攪乱部分をほりあげ、12世紀代の遺構の残存状況を確認したり、当該時期の遺構にあっても、必要に応じて半載して土層堆積を確認し、重複関係を把握する調査を実施したためである。

なお、A地点で確認された大形建物跡を中心に空撮を行っている。また、発掘グリッドに関しては、半載した遺構等については人力で埋め戻し、その後重機を利用して旧状に復旧し保存を計っているものである。

II 検出された遺構と遺物

1 A地点の遺構と遺物

A地点は平成2年度の第28次調査（埋蔵文化財センター調査）によって、園池の北側に建物跡が集中して確認された地区の北側に位置する。調査区中央での標高は27m、ほぼ平坦な面ながら調査区の東南側は第37次調査のE・C地点の低い面に接する。かつては民家が所在し、それに関係するであろう攪乱された部分も少なくない。

ただし、北側グリッドライン64付近には、表土の下に黒褐色土、やや紫がかった茶褐色土が堆積し、遺構検出面はそれぞれの面に存在する。この層は北側の水田部分には存在せず、耕作や水田造成によって失われたものと推定できる。また、南側には第28次調査の排土が厚く堆積し、その下にわずかにこれらの層が認められたが、遺構検出面はいずれも黄褐色粘土層であった。本地点の基本層序は、以下のとおりである。

- | | | | |
|-------|------|--------------|--|
| 第I層 | 表土 | (層厚約20~30cm) | かわらけの碎片を含む。 |
| 第II層 | 黒褐色土 | (層厚約10~15cm) | やや柔らかく、下部につれ固さを増す。かわらけ碎片・陶磁器片炭化物等を含む。 |
| 第III層 | 茶褐色土 | (層厚約5~10cm) | 固くしまり、かわらけ等の遺物をあまり含まない。遺構の埋土は基本的にこの土質で、やや紫がかり、第IV層の小ブロックも混在する。 |

第IV層 黄褐色粘土層

〔柱穴・掘立柱建物跡〕

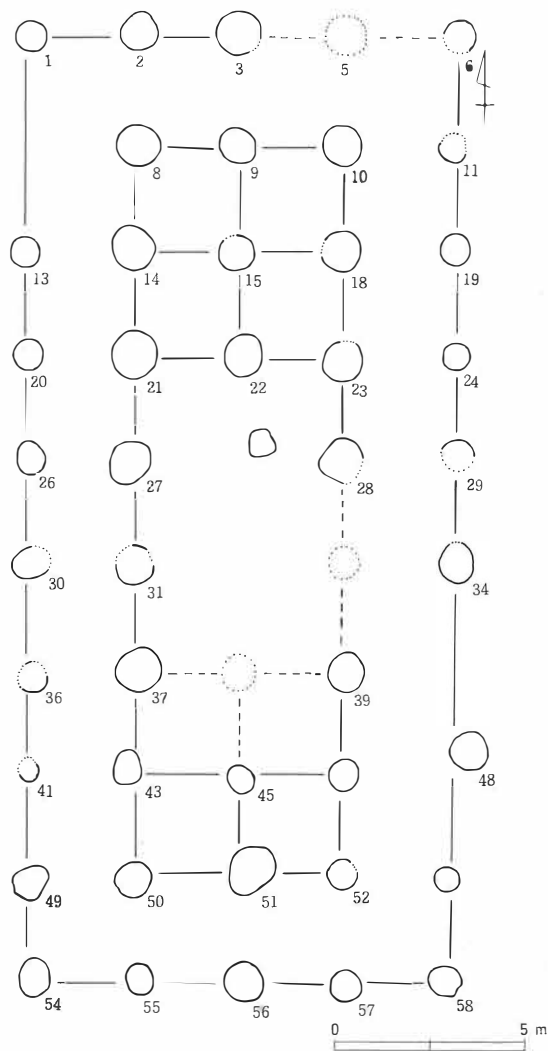
A地点では多数の柱穴を検出しているが、建物跡として確実に追えたのは二棟である。

このうち、大形建物跡とした42S B01は、僅かに西に振れるがほぼ南北の長軸をとる。4×9間の柱配列からなり、おそらく2×7間の母屋と四面に庇をわたした構造となる。母屋はさらに2×2間の柱配列が3間を隔て対立する(第6図)。

建物中央部にP61とした不整形の土塋があり、かわらけの完形品が伏せた状態で出土している。周辺には関係する遺構がなく、おそらくこの42S B01に関係し、鎮壇的な施設の可能性が高い。この42S B01は、平成2年度の調査で確認された28S B4と同一のもので、その際には、こぶし大の礫を埋土に持つことから、根石と捉え、礎石立ちの建物と推定していた。しかし、全体を通じて柱穴を比較すると、柱当たりを持つもの、礫が散在するものなどその状態はバラエティに富み、むしろ掘立柱建物跡で柱抜き取り行為を窺わせる検出状況であった。その特徴的な柱穴の平・断面図を第7図に掲げた。これらの柱穴は、最大のもので直径1.24m、最小で0.68mを計り、平均は90cm程度になる。一部、P1-13間とP34-48間の柱は検出できな

かった。この42S B01は、後述する42S B02の柱穴に切られ、また大溝（42S D01）にも切られる。また、建物南部の柱穴は、別の柱穴や井戸状遺構と重複する。従って、南半には、東西軸の別の建物跡がこの建物を含め三時期にわたって存在する可能性もある。

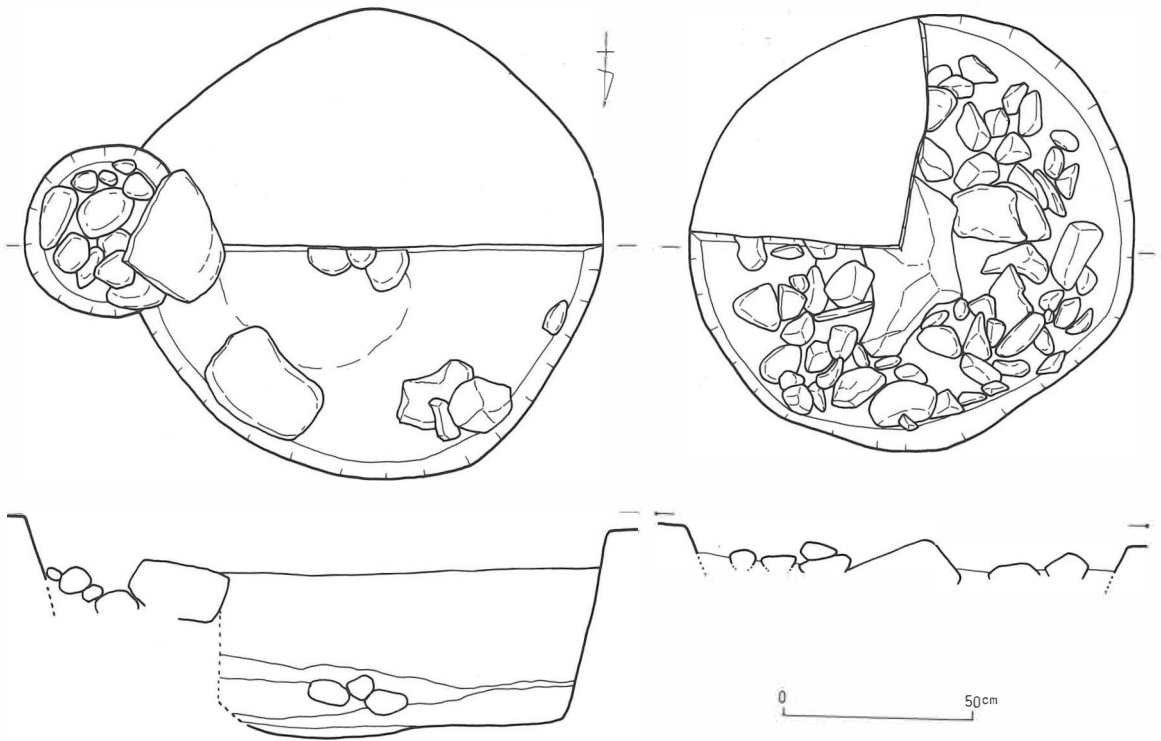
この42S B01周辺には、南に細い42S D15、東に42S D13・42S D14の堀跡状の遺構が見られ、この建物と関係する施設と考えられた。なお、より東側に延びる可能性があり検出に努めたが、直接関係する柱穴は検出できず、42S B01はこれで収束すると思われる。



第6図 大型建物跡柱穴配置図

No. 3

No.37 (礎敷柱穴)



第7図 大型建物柱穴平・断面図

42S B01の北東部に重複して検出した42S B02 (第8図) は、確認規模で桁行5間、梁行4間となる。やや軸線がずれるが北辺の対応するであろう柱穴まで加えると桁行8間程度の規模となる。長軸の基本的な方向はN40° Eとなる。柱穴には礎をもつもの、もたないもの双方があり、径も30~50cmとあまり一定しないが、2間×4間以上の母屋と四方に庇がつく構造となる。柱間は2.45~2.75mを計り、平均は2.50mとなる。重複関係は、42S B01を切り、42S D01に切られる。

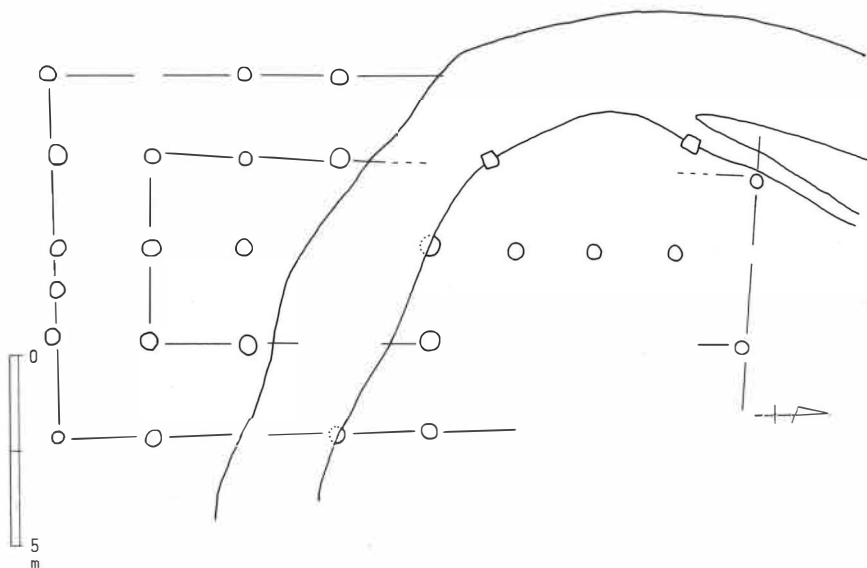
A地点にはこのほかにも柱穴が多数検出されているが、規模の大きな建物は、この42S B01・42S B02以北には確認できていない。42S B01に類似する建物跡は、平泉町教育委員会による堀の外側地区での30S B1という4間×9間の東西軸をもつ例がある。堀内部の園池北側に位置する建物群にあっては、本遺構が最も大きく、柱穴も大規模である。並列する遺構は埋蔵文化財センターの調査でも確認されていないが、東西軸を持ち、その南北軸が平行する建物は確認されていることから、この地区が堀内部での一つの中核を成す施設が集中していたことは疑えない。

〔塀跡・柱穴列〕

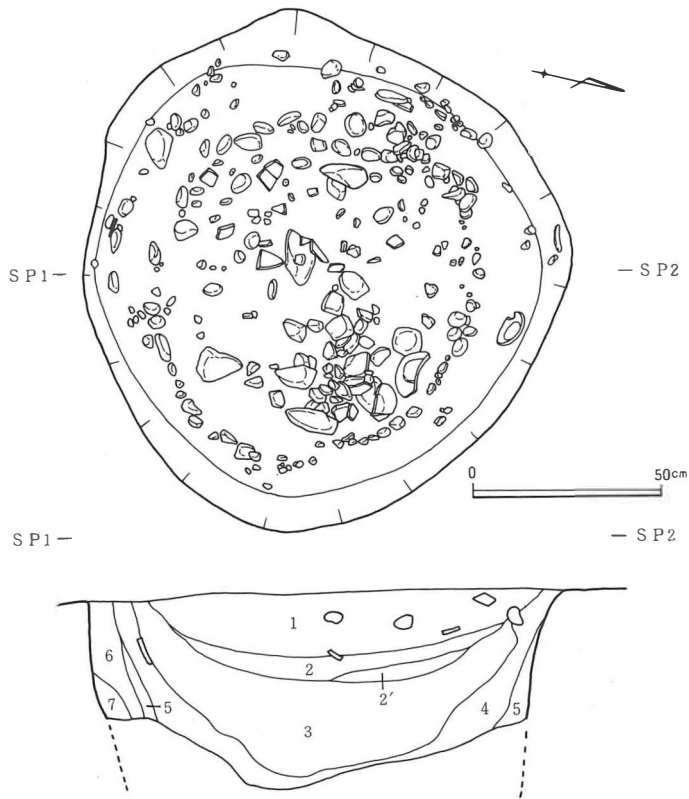
A地点で塀跡として確認した遺構は、42SD04・42SD09・42SD10・42SD11・42SD12・42SD13・42SD14・42SD15の8条である。このうち42SD13・42SD15は、42SB01と平行することからそれに付随する可能性が高い。42SD14は、42SB02の長軸と平行する。42SD13は北端で東に直角に曲がるが、その先は、大溝（42SD01）によって切られ、確認していない。

42SD09は最大幅約60cm、東に向かうにつれ幅は狭まる。検出した部分の長さは16.65mである。79・64グリッドで南から走ってくる42SD10と合わさる。さらにその3m東で42SD11と交わる。42SD10は42SD09との合流部で途切れ、検出部分の長さは3m程度である。42SD11は、やや不確実ながら42SD09を切って北にのびる。北端は42SE02とした井戸状遺構に切られ、消失する。検出部分の長さは9.80m、42SD09との交差部より南側には、直径約50cmの柱穴状の掘込みが、約2.5mの間隔で3個検出されている。とりわけ南端の柱穴部には円礫を充填していたことが確認できた。

これら3条の塀跡は、いずれも南北（42SD10・42SD11）、東西（42SD09）に走ることから、42SB01やその周辺の東西軸をとる建物群の構成と関係が窺える。さらに内部確認はしていないが、やや東南方向に傾く42SD04の存在、規模は小さいがさらにその北側の平行する塀跡まで規制を受けていたことも考えられる。これらの北側では現在のところ確実な建物跡が確認されていないことも、それを支持するかもしれない。



第8図 建物跡柱穴配置図

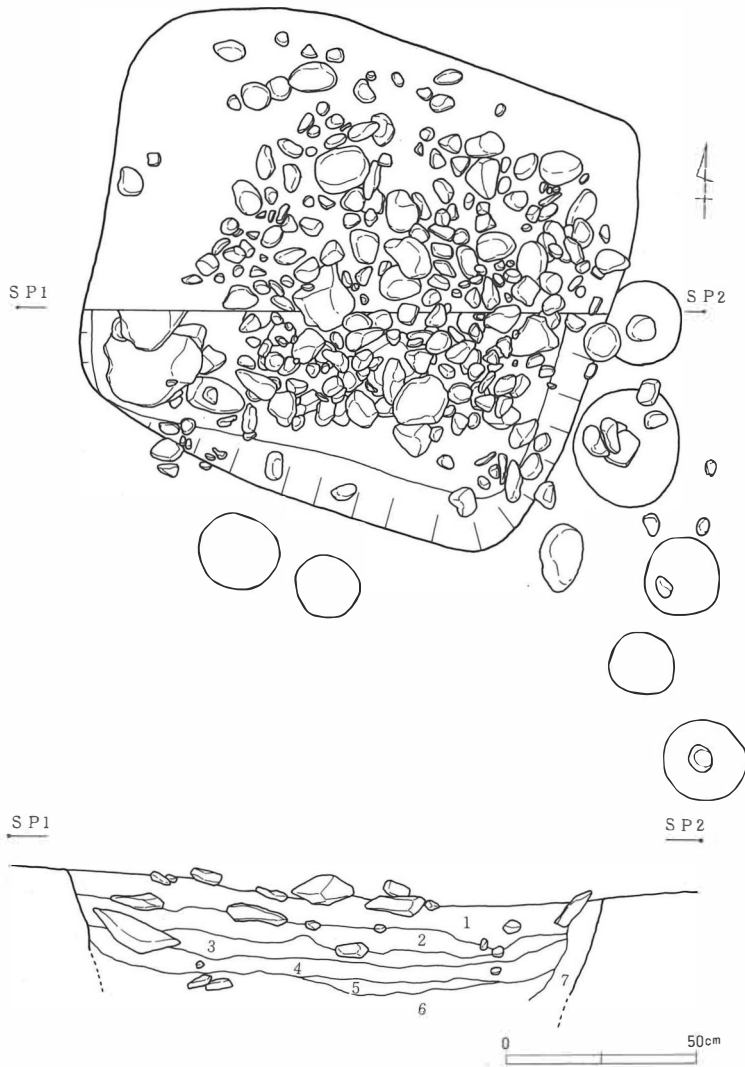


第9図 土壌(42SK02)平・断面図

〔土 壌〕

A地点内で検出した土壌は約20基であるが、その大半は近～現代の攪乱であった。ここでは65-81グリッドの北東隅で検出した42SK02(第9図)について述べることにする。なお、遺構内部を確認したものはこの遺構のみである。

42SK02は、大形建物跡(42SB01)西柱穴列を北に約8mほど延長した部分に位置する。検出面で、南北1.29m、東西1.28mのほぼ円形を呈するが、西側部分はやや脹らむ。埋土は最上層に第3層の粘土ブロックや礫を混じえた土層が堆積する(1層)。検出時この層の回りには、埋土4層がドーナツ状に巡っていた。2層は褐色土、下位には炭化物やそれを混じえた砂が集中する部分(2'層)が堆積する。3層は1層同様粘土のブロックから構成される。この3層までが、人為的な堆積と思われる。



第10図 井戸状遺構 (42S E 01) 平・断面図

4層は砂層、A地点周辺にはこのような砂は分布せず、おそらく北上川の川原や氾濫原から持ち込まれたものと思われる。5層は黒褐色を呈し、大粒の炭化物が壁面に張りつくように分布する。周辺の土層や礫には焼痕がみられ、従ってこの炭化物は原位置で生成したと考えられる。6層も同様の炭化物層、やや小粒になる。7層は壁面地山の崩落したブロックである。

埋土の掘り上げは、4層に止めており、壁の傾きからさらに深くなると推定できる。

遺物は、1～3層には僅かにかわらけの細片を混じえるのみだが、4層上面に小形かわらけの完形品を含む遺物が集中する。これらのかわらけは平面観でみるなら、4層下部に径80cmほどの円形を呈するように、2～5cmの円礫を巡らし、そのうえに廃棄されたような状態で出土している。この4層は、炭化物は混じるものの、熱は受けていない。

出土したかわらけは、いずれも糸切り底をもつもので、陶磁器・手づくね系かわらけは含まれていない。

よって、この土壌は、その下部の状況は不明であるが、穴をほり、その内側で火を燃やし粘土を突き固めた上に、小礫を円状にならべ、かわらけを廃棄し(置き?)、砂を被せ、最後に二度に渡って粘土で覆ったことがわかる。1～3層の断面観察によるかぎり、おそらくマウンドを有していたとも捉えられる。

これまでの柳之御所跡の発掘で、数多くの土壌が検出・調査されているが、このような例は報告されていない。前述したように、この42S K02は、大形建物跡(42S B01)西柱穴列を北に延長した部分に位置することを考えると、何かしら宗教儀礼を伴う行為の所産に係る遺構である可能性が指摘できる。

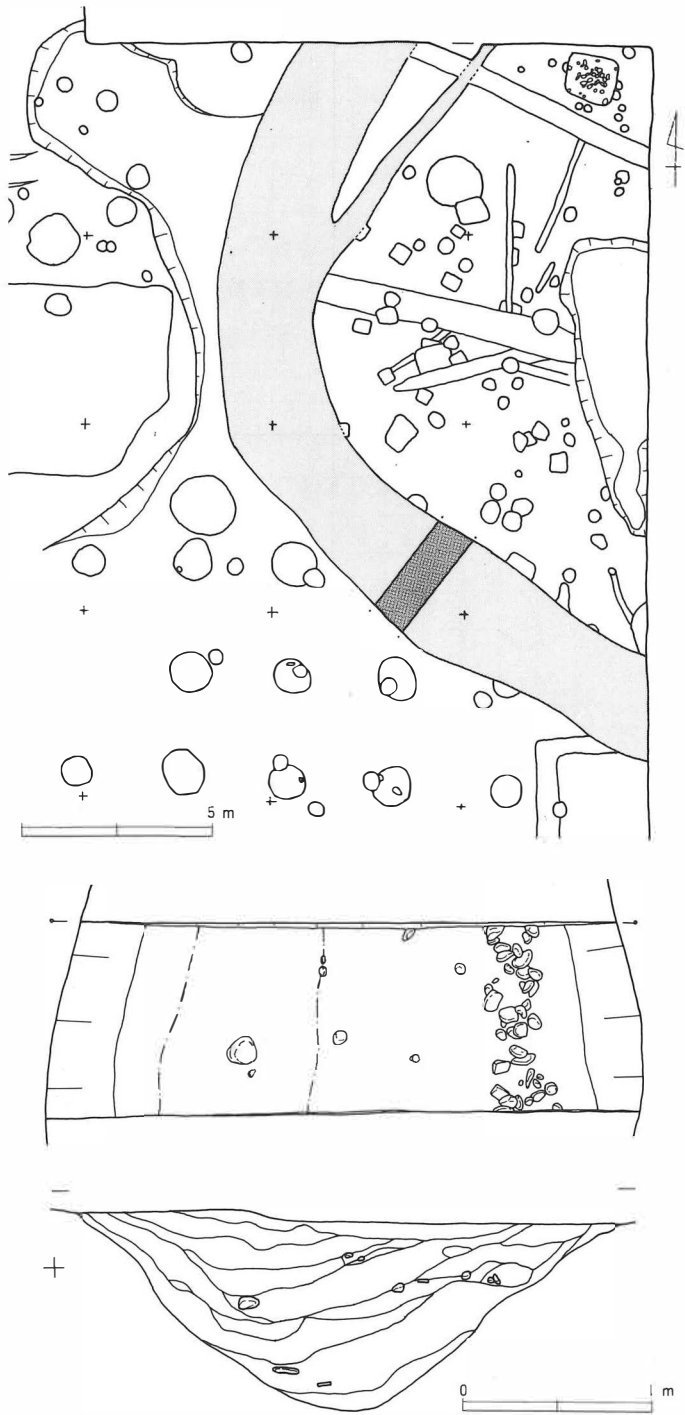
〔井戸状遺構〕

A地点内で確実に井戸状遺構として捉えられたのは、7基程度である。規模的には直径1mを越す大形のものもあるが、一部確認しても浅く、また不整形な遺構が多かった。ここでは、64-84グリッド北東部で検出した井戸状遺構(42S E01)について述べる。

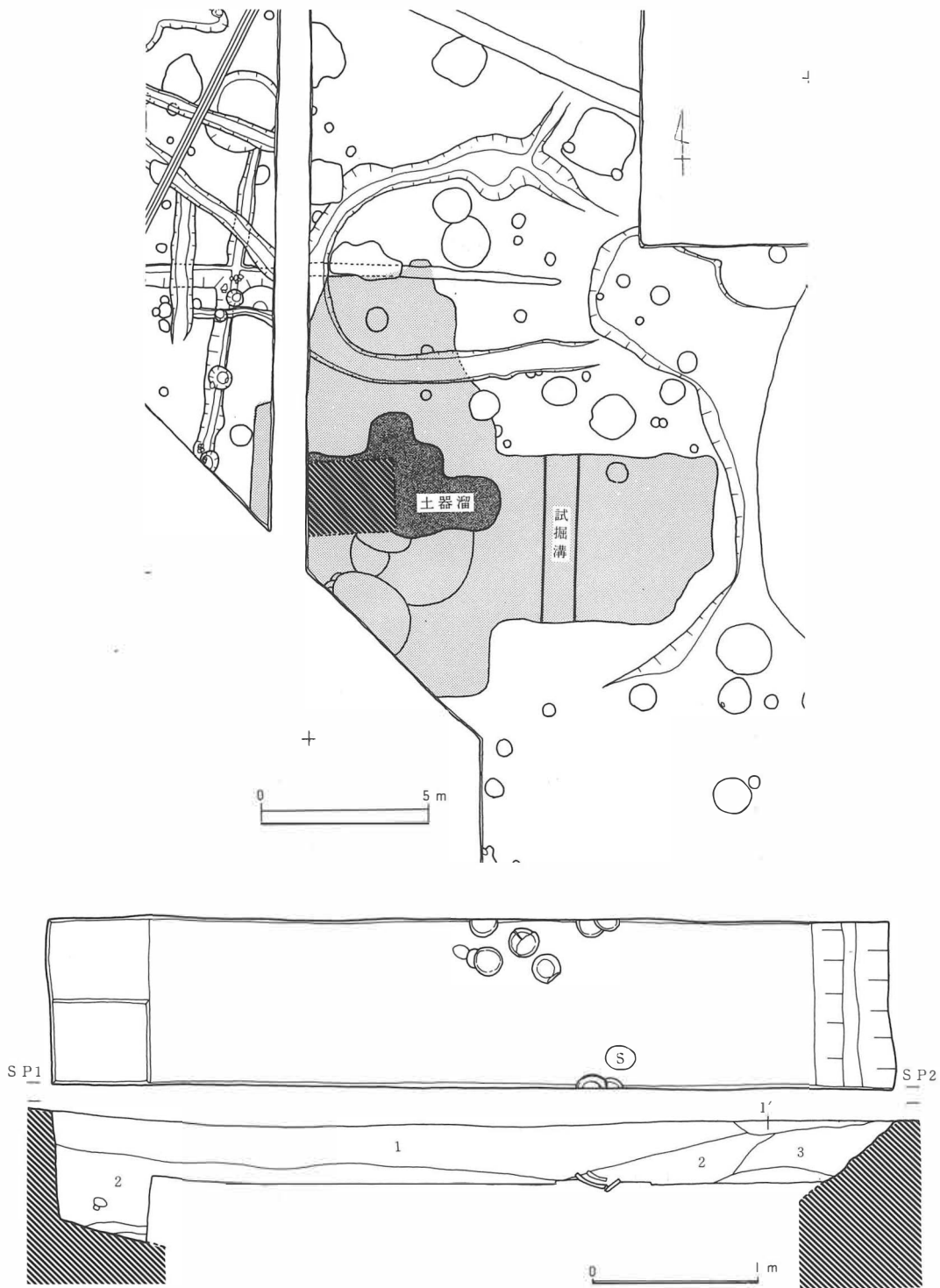
42S E01は一辺約1.2mの方形を呈する。南北軸は東に約20°傾く。確認調査ではこの遺構の南半分を半裁し、深さ30cmほど掘り下げている。遺構の埋土には確認時点から礫が集中して検出された。礫は角礫～円礫を混じえ、大きさもまちまちである。垂直的には、埋土3層より上位に多く、4層以下は少ない傾向にあるが、全体を調査していないので不詳である。礫中にはかわらけ小片が散在するのみで、遺物量は少ない。

埋土断面の観察による限り、土層は自然堆積と思われた。下層になるにつれグライ化が進む傾向も指摘できる。従って、この遺構に関しては、ある程度埋没が進み、凹み状になった時点で、礫が廃棄されたものと思われる。なお、この遺構の東南方向に径15～30cmの柱穴が7個検出している。これらの中には、本遺構と類似した埋土を持つものもあることから、同時期に存在した可能性もある。

このような礫を埋土に持つ井戸状遺構は、平泉町教委による30S E4、30S E6など各地点で確認されている。この確認調査でも平成4年度に37S E4とした井戸状遺構を一基確認している。



第11図 大溝 (42S D01) 平・断面図



第12図 整地層の範囲および断面観察トレンチ

〔溝状遺構〕

数多くの溝及び溝状遺構を検出している。このうち42SD03とした礫を充填した遺構を、A地点北端部のグリッドで検出している。この礫のなかに近代の擦り鉢の破片が混入してあったことから、近代以降の遺構であると判断した。従って、これを切る42SD02も新しい時期の所産と言える。42SD06～08は、いずれも途中で消失する浅い溝で、12世紀代の遺構である堀跡群を切っている。所属時期は不詳だが、42SD08が最も古い。なお、42SD05は、電線ケーブルが埋設された現代のものである。

A地点64-83グリッドから67-85にかけ大きく弧状に曲がる溝(42SD01)は、昨年度37SD8とした溝に繋がるものである。幅約3m、北部で大小二条に別れる。他の遺構でこれより新しいものはなく、埋土も自然堆積であり、新しい時期の所産と考える。

〔整地層〕

65-80グリッドを中心に、南北13m、東西14mの横T字状を呈する、地山の第IV層を掘り、その地山ブロックを埋土とする遺構を検出している。規模の大きいことからそれを整地層遺構と呼称した(第12図)。

この整地層を確認面に、42SE03・04などの井戸状遺構が分布し、その上に土器溜まりと呼んだかわらけの一括廃棄ブロックが堆積する。さらにその上層に小礫からなる礫群が形成されている。この礫群内からは、近世陶磁器の破片が一点出土しており、近世以降に形成されたものであるが、それより下層の土器溜まり、井戸状遺構についてはいずれも12世紀代の遺構と見なせる。このことは整地層と堀跡(42SD09)との関係からも追え、整地層は42SD09に切られる。これらの遺構以外、僅かの攪乱を除き、特段の遺構はこの部分には存在しない。

この整地層遺構の性格把握のため、82ラインの西側に幅1mの試掘溝を設定した。その結果断面は、北壁はほぼ垂直に65cm掘り込まれ、底面は中央部に向かって緩やかに傾斜していく。南壁は、それに比べ緩やかで傾斜変換をもちながら、底面へ達するものと推定できた。

埋土は、断面図では四層に区分したが、いずれも地山の粘土ブロックに僅かな茶褐色土を混ぜたもので、人為的に短期に埋め戻されていることがわかった。埋土1層からも比較的大きなかわらけ破片が出土したが、2層上面でかわらけ完形品がまとまって出土したため、その層位で調査を中止した。これらのかかわらけは、糸切り底・手づくねタイプ両者あり、また大形・小形とも出土している。出土状態は、多くは口縁を上にしており、中には重なった状態で出土したものもあり、単純な廃棄行為によるとは思えない状況を呈していた。

大形建物と堀跡との中間に位置すること、一部ではあるが整地層によって切られる遺構もあることから、単純な地形改変の整地作業でないことは確実である。

2 B地点の遺構と遺物

B地点は、遺跡の東側、北上川にかかる高館橋に近い、川沿いの地点である。周辺の標高は25mを計り、東側は北上川の氾濫部へと落ち込んでいく。この地点は、平成4年度にも一部調査を実施しているが、遺構検出に若干疑問があったため再調査を実施したものである。

この地点は西側にかけて民家があり、その庭先であったという。南北99列の中央部には、その当時の井戸があり、砂でもって埋められていた。このほか、各所に新しい攪乱ピットが確認されている。土層は、灰黄褐色の表土の下に、地山ブロックを混じえ、ややしまった土層があり、その下は地山の灰黄褐色砂質土となる。遺構検出面は、この土層である。

調査区北端の66-95グリッドは、かつての北上川擁壁工事によって削平された部分であり、遺構の残存は良好ではない、一条の柱穴を有する塀状遺構を検出している(42S A20)。これは検出部分の長さ約7.5m、北端部に2ヶ所の柱穴残痕が確認できた。

この42S A20を切り、埋土に小礫を配する柱穴列を一条確認している(42S A21)。柱穴は4個、ただし対応する列は確認できず建物跡には復元できなかった。軸線はN40°Wとなる。

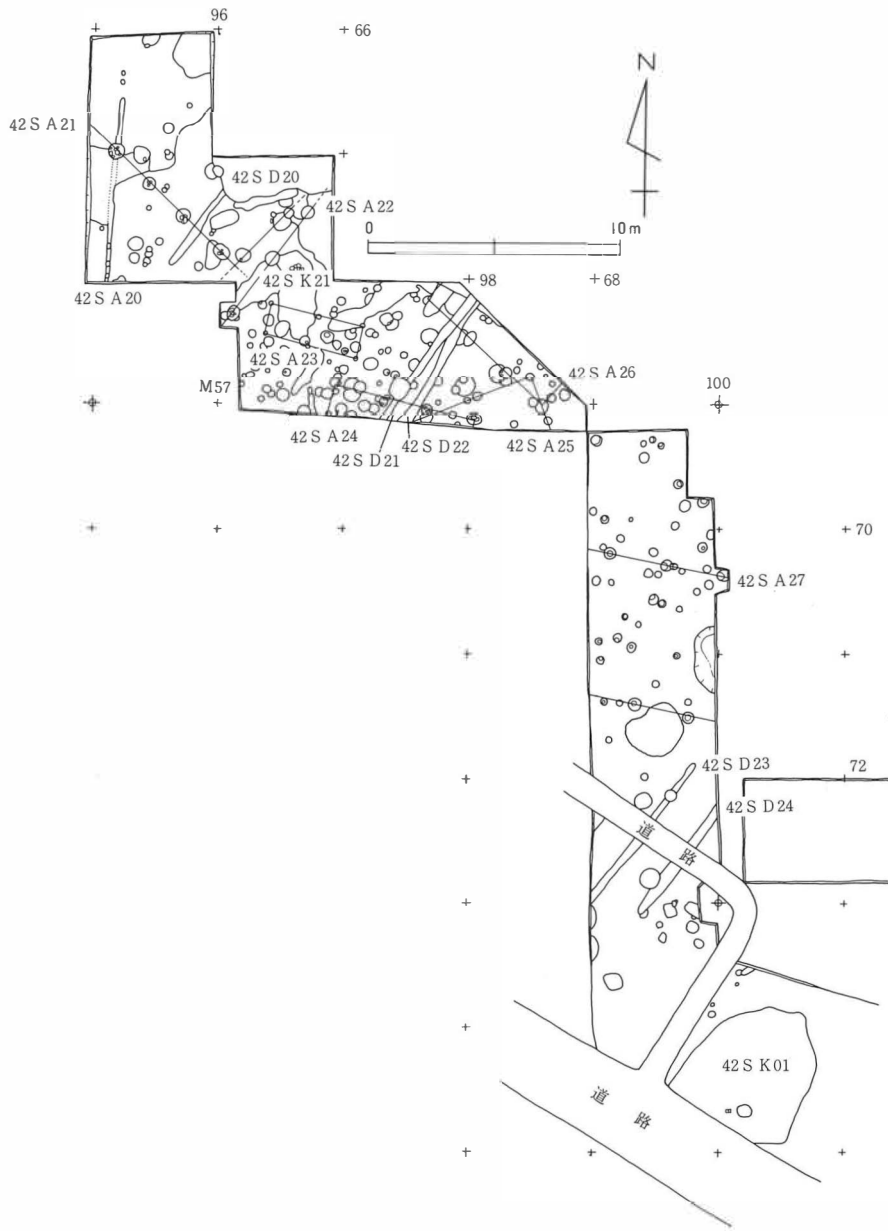
これらの東南部には、多数の柱穴が確認できたが柱穴列・建物跡として把握できた例は少ない。42S A23は、桁行2間、梁行1間の小規模な建物で、柱穴も小さく、間尺も1.7~1.8mと小さく、近世以降の建物跡である可能性が高い。これの北西に二列の比較的大きな柱穴からなる柱穴列を確認しているが、やはり建物にはならなかった。

これらに切られる関係で、67・68-96グリッドに礫を埋土にもつ不整楕円形の土壌を検出している。長軸はほぼ南北をとり、長さ3.2m幅1.5mを計る。井戸状遺構とは異なり、浅い断面を持つものと推定される。

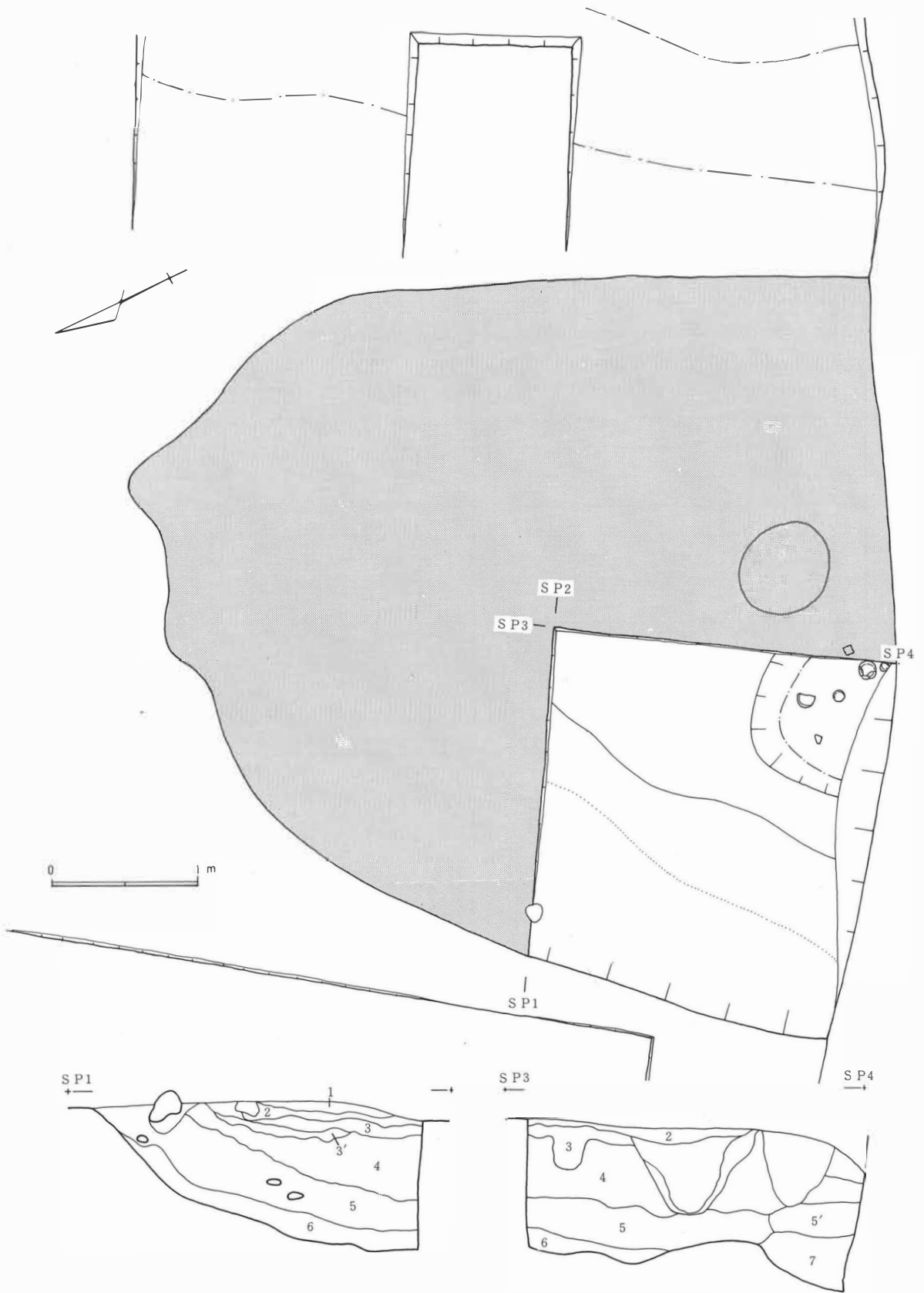
42S D21・22は、溝状遺構であるが、埋土はしまりがなく、確認面も表土直下であることから、最近の排水路の可能性が高い。これらに切られるように、42S A24~26を検出している。いずれも小規模な建物跡で、軸線方向も一定しない。

南北に細長く設定した99ラインのトレンチでは、42S A27の建物跡一棟と二状の塀状の遺構を検出している。前者は、軸線が東西ラインよりやや東下がり。桁行4間以上、梁行も2間程度になる。後者は、それぞれ途中で消失するが、N40°Eの傾きを持ち、平行する。これに見合う柱穴列等の遺構は確認できなかった。検出部分の長さは、S D23が6.8m、S D24は5.1mである。

この塀状遺構の上部には、前述したかつての民家へ通じていた簡易舗装の通路が横たわる。高館橋のたもととの沖積面から登ってくる道路に、この通路は直角に交わる。その部分で42S K01とした竪穴状の土壌を一基検出している(第14図)。この部分から傾斜がややきつくなり、それより東側は、段丘崖となっている。



第13図 B地点検出遺構平面図



第14图 土壤(42SK01)平·断面图

この42SK01は、長さ5.2m、幅5.25mで、南側は道路の下にもぐり込む。長軸方向は、N30°Wである。そのうち南西の四分の一を掘り下げ、内容を確認した。

灰黄褐色を呈する埋土1層が全体を薄く覆い、その下位に地山ブロックを含む3層が堆積する。さらにその下には、暗褐色の4層が厚く堆積する。この4層の下部には赤褐色に酸化した土層が南側に集中して分布する。なかには、金属製品と見紛う大形の高師小僧も横になって発見されている。

この4層中からは縄文時代晩期の土器片や石鏃が出土した。しかし、土器片はいずれも細片でしかも磨滅していることなどから、再堆積したものだと捉えた。埋土は、さらに下層の5層(黒褐色土)、地山ブロックを混じえた6層(黒褐色土)に細分できた。床面はあまりしまりなく、かなり波うつ状態であった。特に、南側の床面近くで方形の掘り方が確認でき、そのなかから、かわらけが数点まとまって出土している(第19図)。

出土状態を見るかぎり、かわらけは特に埋納されたような印象はなかった。埋土の堆積状況からも、基本的には自然堆積と思われる断面を呈していた。

この範囲で見るかぎり、床面には柱穴のような上部施設存在を裏付けるような遺構は存在しない。ただし、4層の下部に赤褐色酸化層があることから、5層堆積のあと若干の時間差があり、水が溜まり、その後に埋土上層が堆積したものと考えられる。

この遺構の東側、北上川沖積面方向の段丘崖面も、その一部について確認しているが、特段の遺構は検出できなかった。従って、柳之御所遺跡の範囲は、この段丘上面で収束することが明らかになったといえよう。

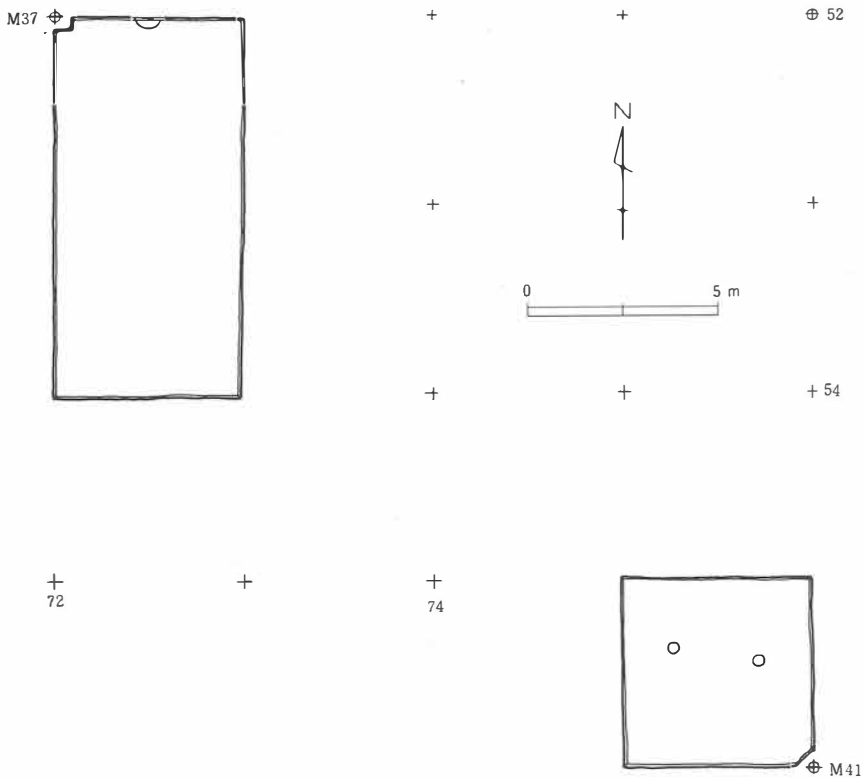
なお、柳之御所遺跡内からは縄文時代の遺物も少なからず出土している。しかし、今回の範囲確認の調査範囲のなかからは、確実な縄文期の遺構は検出されていない。従来は、12世紀代にかなりの施設が営まれ、削平されたため残存していないと考えられてきたが、未調査部分にかなりの縄文期の遺構が存在する可能性は否定できない。さらに付け加えると、A地点で地山とした粘土層のなかから一点チャートの剥片が出土している。段丘縁辺に位置するこの遺跡には、さらに遡る人類活動の痕跡を見いだせる可能性もある。

3 C地点の遺構と遺物

C地点は、A地点の北西方向、グリッドでは52・53-72の南北二箇所および55-75の都合3グリッド、面積は75m²を計る。昨年度の範囲確認調査でこの北の地点からは堀跡2条・土塙4基、溝3条のほか大小の柱穴約60基が検出され、大形の建物の存在が予想された。今回の調査は、埋蔵文化財センター調査区と昨年度の範囲確認調査区との間がどのような利用があったのかを調査することを目的とした。現状は、水田（休耕田）である。

調査の結果、表土の直下に地山の粘土層が広がり、遺物も極めて少なかった。検出した遺構は52-72北隅で柱穴1基、55-75の中央部で小規模な柱穴2基のみであった。前者は、昨年度の範囲確認調査区に連絡する可能性があるが、他の地点と比較しても極端に遺構が少ないことが把握できた。

埋蔵文化財センター調査区でも西側の堀に近い部分には、井戸状遺構が散在するのみで、建物跡は希薄になることから、逆にA地点を中心とする部分が、この遺跡のなかでも中枢を占める空間であることが明らかになったといえよう。



第15図 C地点検出遺構平面図

III ま と め

以上、平成4・5年度にわたって実施した柳之御所跡の範囲確認調査についてその成果の概要を記し、まとめとする。

○遺跡範囲について

本確認調査は、建設省事業予定地の北側と北上川との間の約二万㎡を対象に実施したものでありその中の遺跡範囲は、北上川崖線まで確実に広がっている。特に平成4年度の北上川沿いの調査で、川側に続く遺構が検出されたことは、北上川によって一部は浸食されたことを示している。東側は段丘上面の平坦部で遺構は途切れ、段丘崖その下位の沖積面に遺構は検出できなかったことにより、範囲は限定される。なお、北上川沿いは、過去の擁壁工事により削平されている。

○遺構について

遺構は、調査区全体に広がりを見せる。最近まで、宅地・畑・水田等に利用されていたため削平・攪乱が随所にあるものの、遺構検出面が三層にまたがり、むしろ埋蔵文化財センター調査区より保存状況は良好な地点も少なくない。

範囲確認調査で検出した遺構のうち、特筆できるのは42S B01とした大形建物で、埋文センター調査区で検出されていた園池北側の建物群のなかでも一際大きく、本遺跡の中核的な施設であることが想定できた。

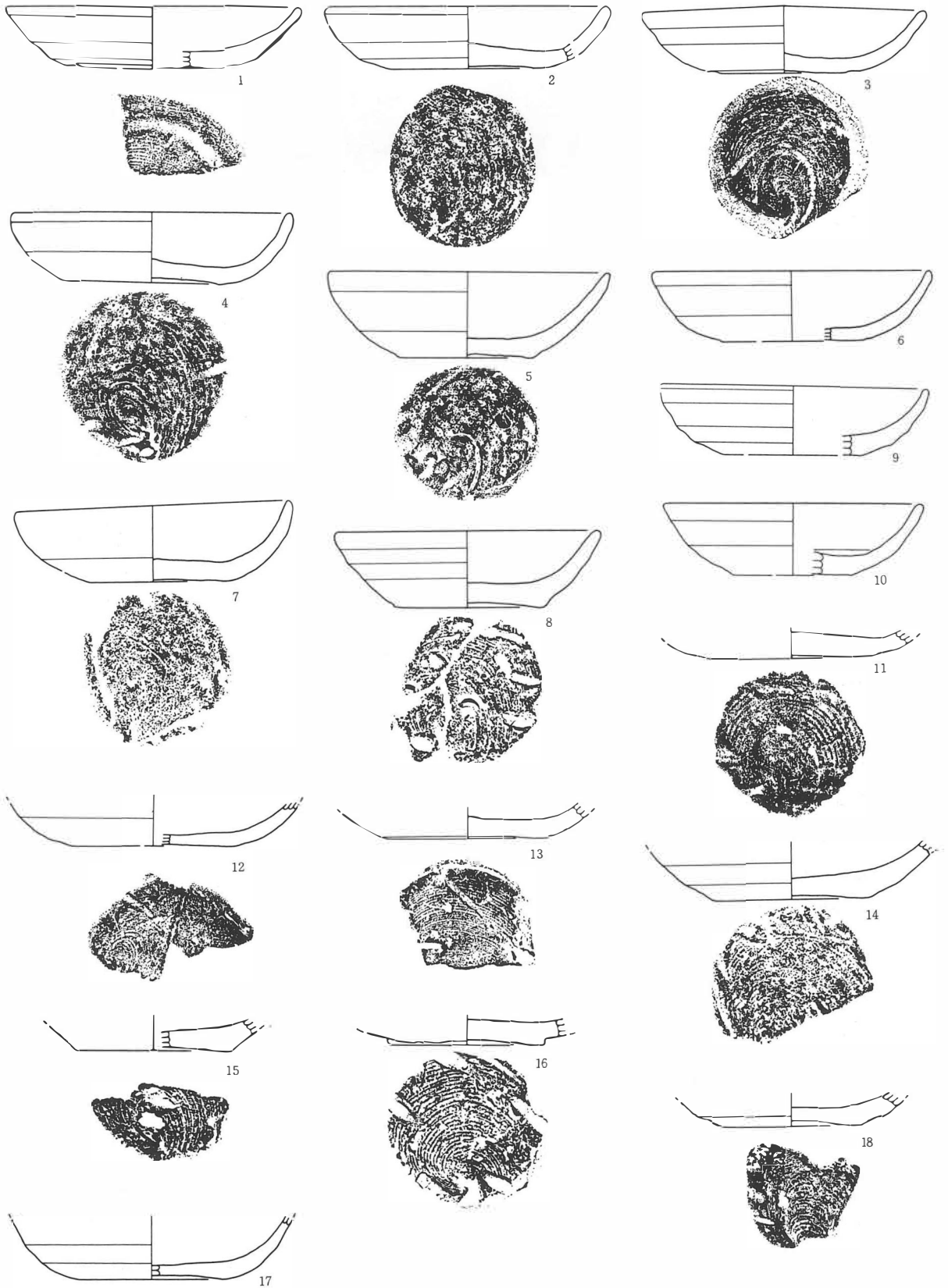
昨年度調査した溝と猫間ヶ淵側に巡る堀との関係は十分に把握できなかった。しかし、この溝埋土下層の白色火山灰とその下から出土した土器群は、平泉藤原氏以前の可能性があり、柳之御所活動期にも機能していたことが窺えた。

42S B01周辺では、小礫・かわらけ・砂のうえに地山の粘土でパックした土壌(42S K02)や整地層遺構のように特殊な遺構が目についた。これらの存在も、この周辺が特別な空間であったことを物語っている。

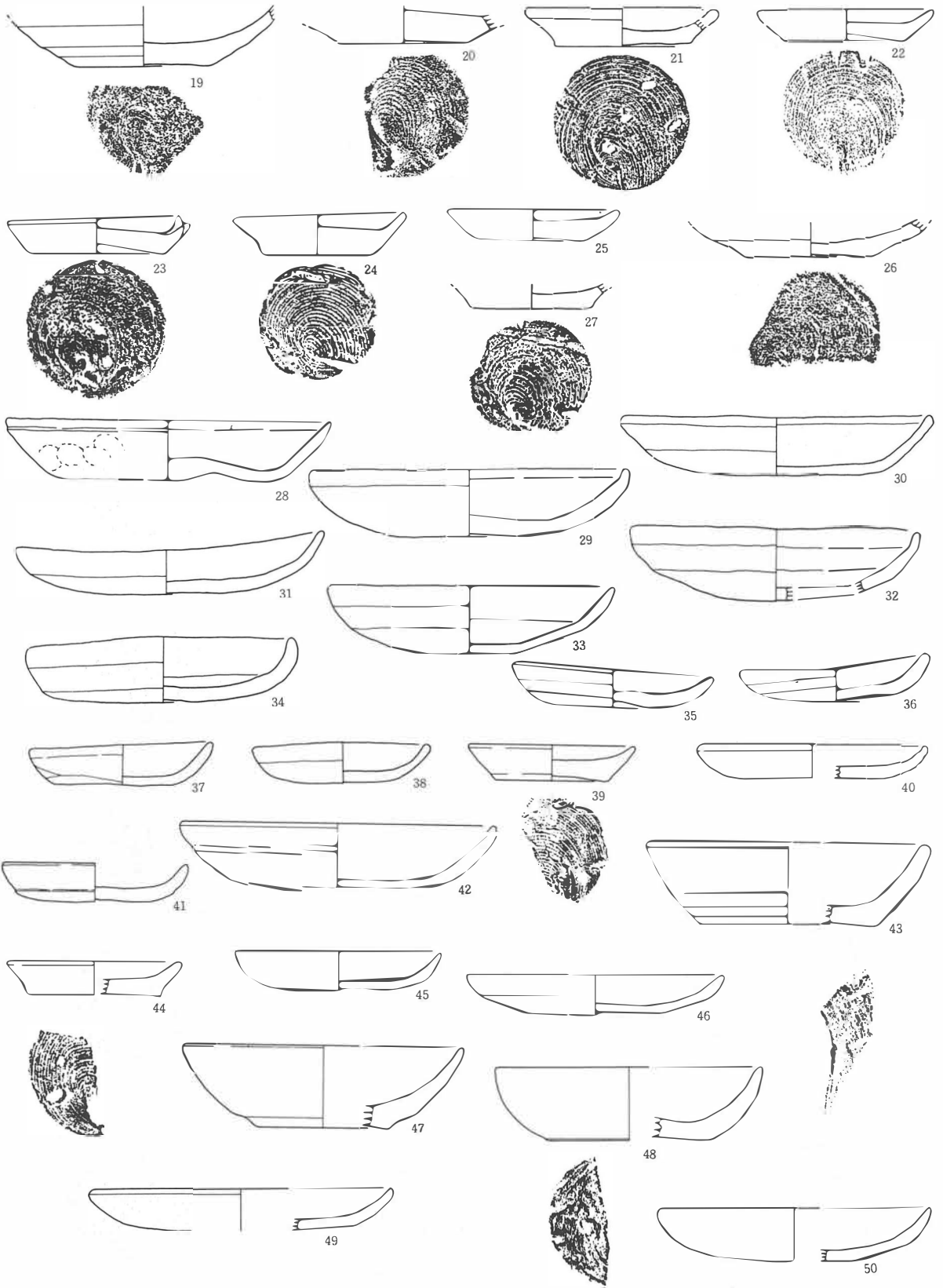
これらを区画する堀の動きもある程度把握できた。さらにその堀や整地層、土器溜まりの重複関係、柱穴の切りあい関係などから少なくとも三時期にわたる活動を想定できた。また、遺構分布に疎密が見られ、ある程度空間利用の状況も把握することができた。

○遺物について

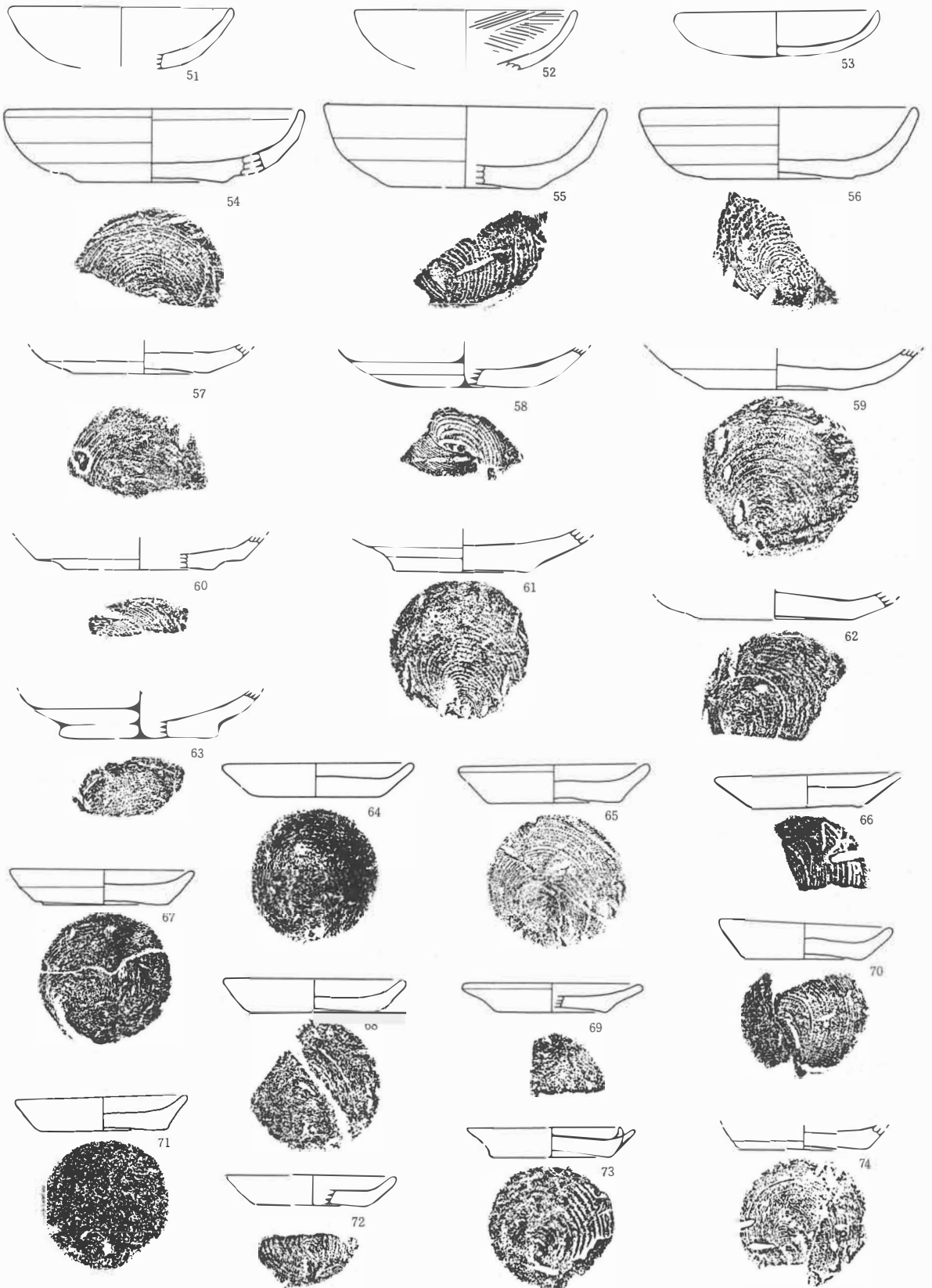
範囲確認調査で遺構内部はほとんど確認していないにも係わらず、遺物の量は多かった。特にかわらけは遺跡全体に散布しており、いかに利用頻度が高かったかを物語っている。陶磁器では、国産陶器が多く、中国陶磁器など舶載品は少ないが、白磁が卓越する傾向にある。時期産地とも、これまでの所見を越えるものはない。瓦に関しても同様であった。



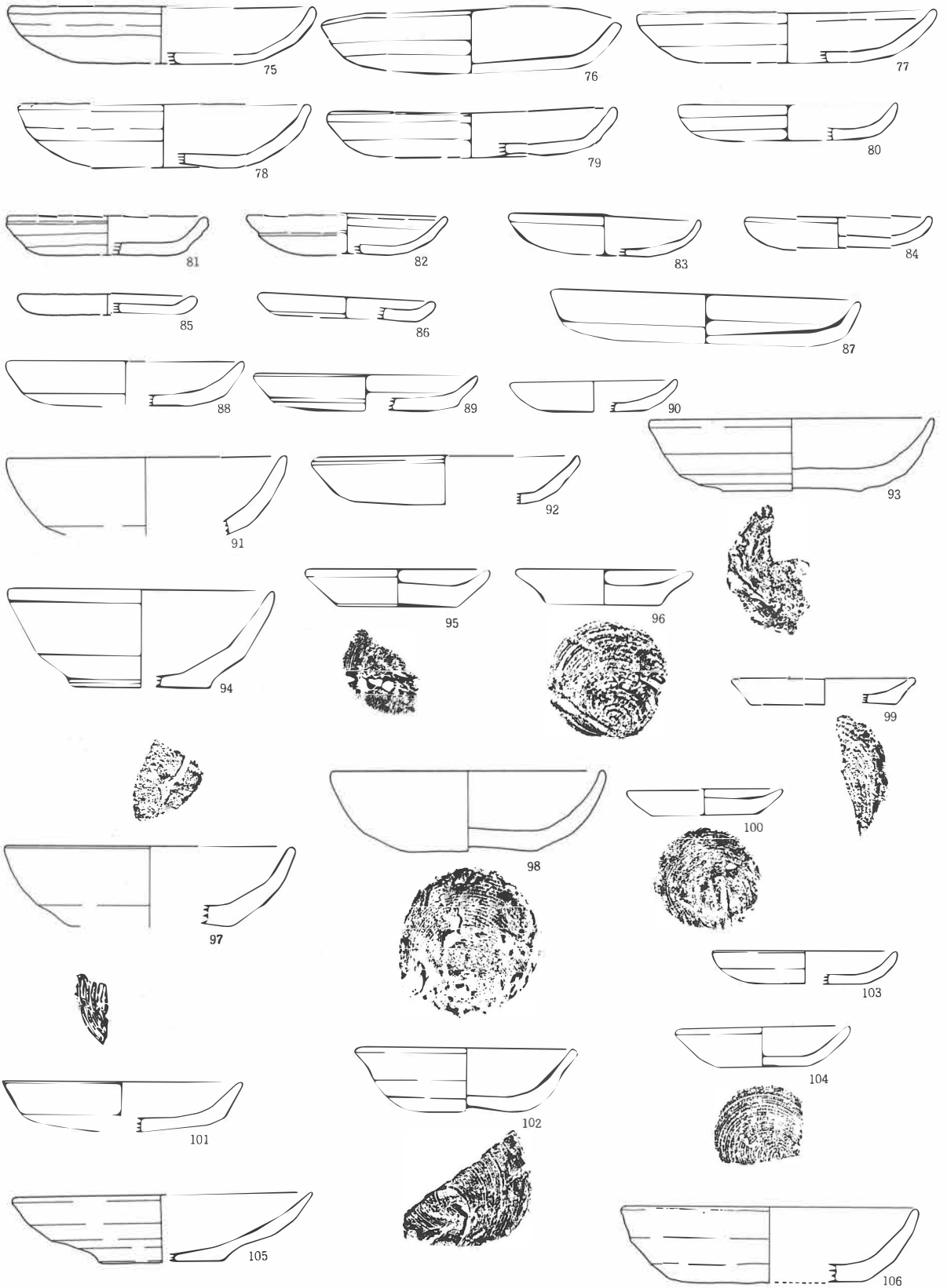
第16図 かわらけ(1)



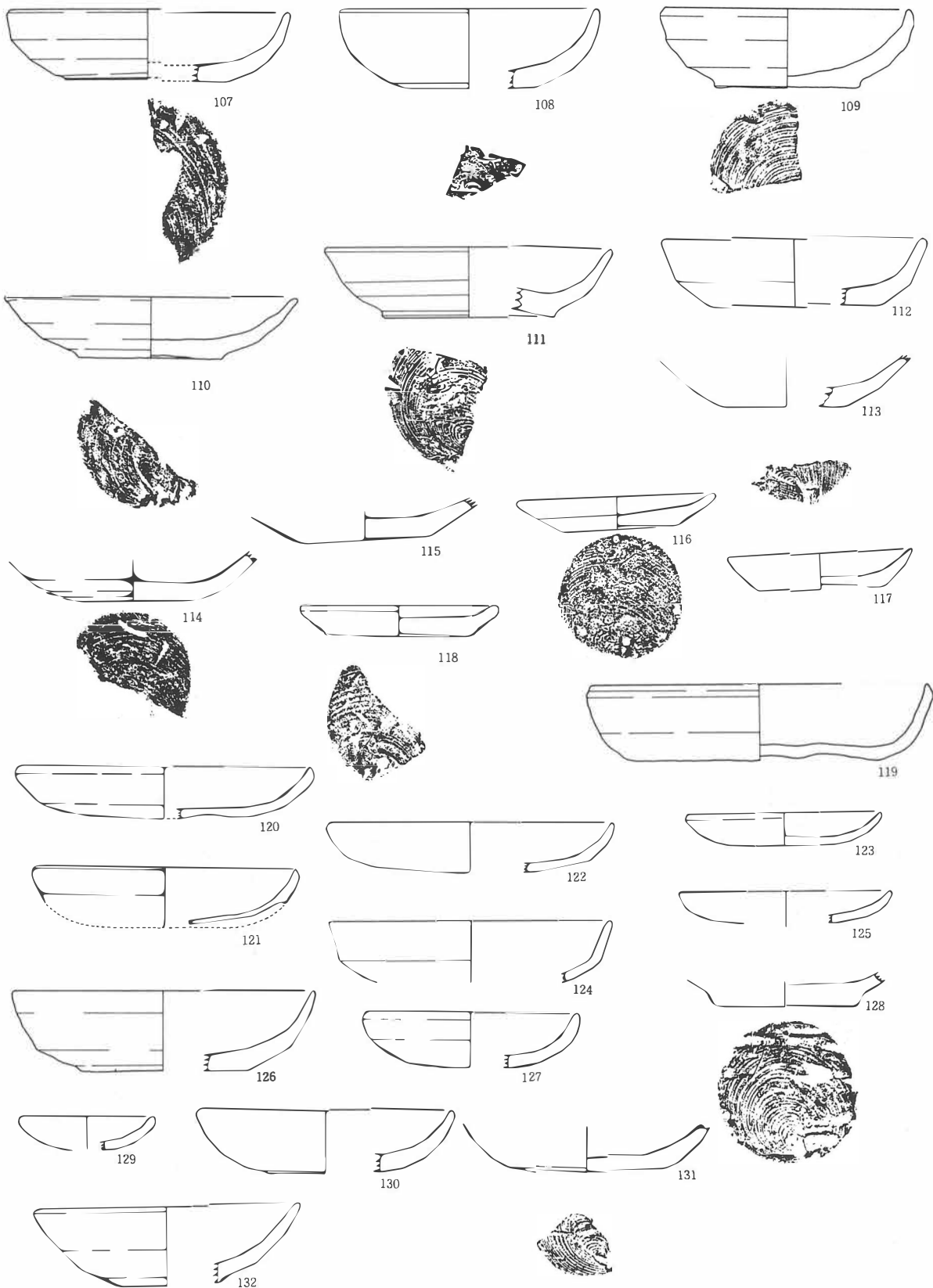
第17図 かわらけ(2)



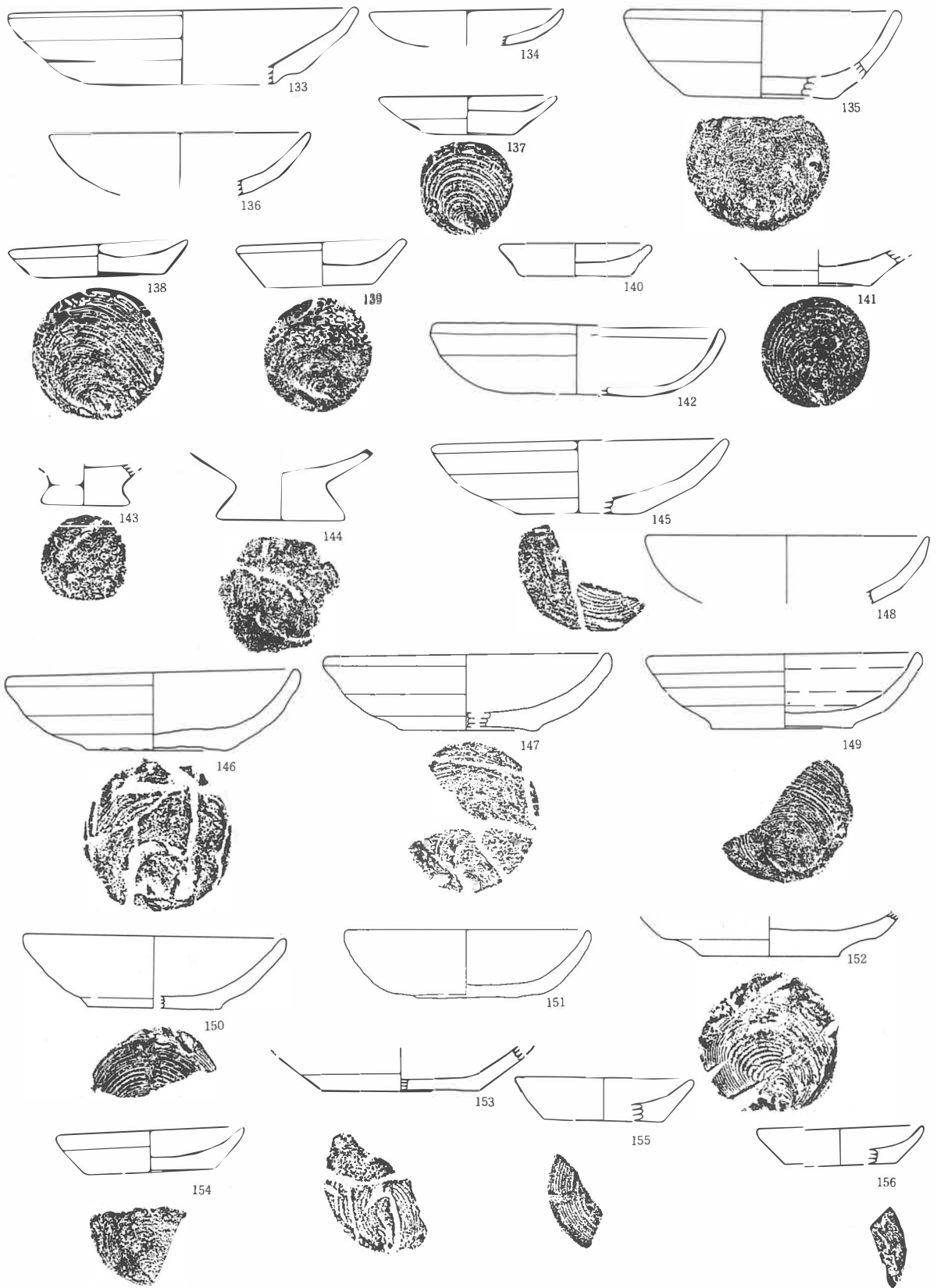
第18図 かわらけ(3)



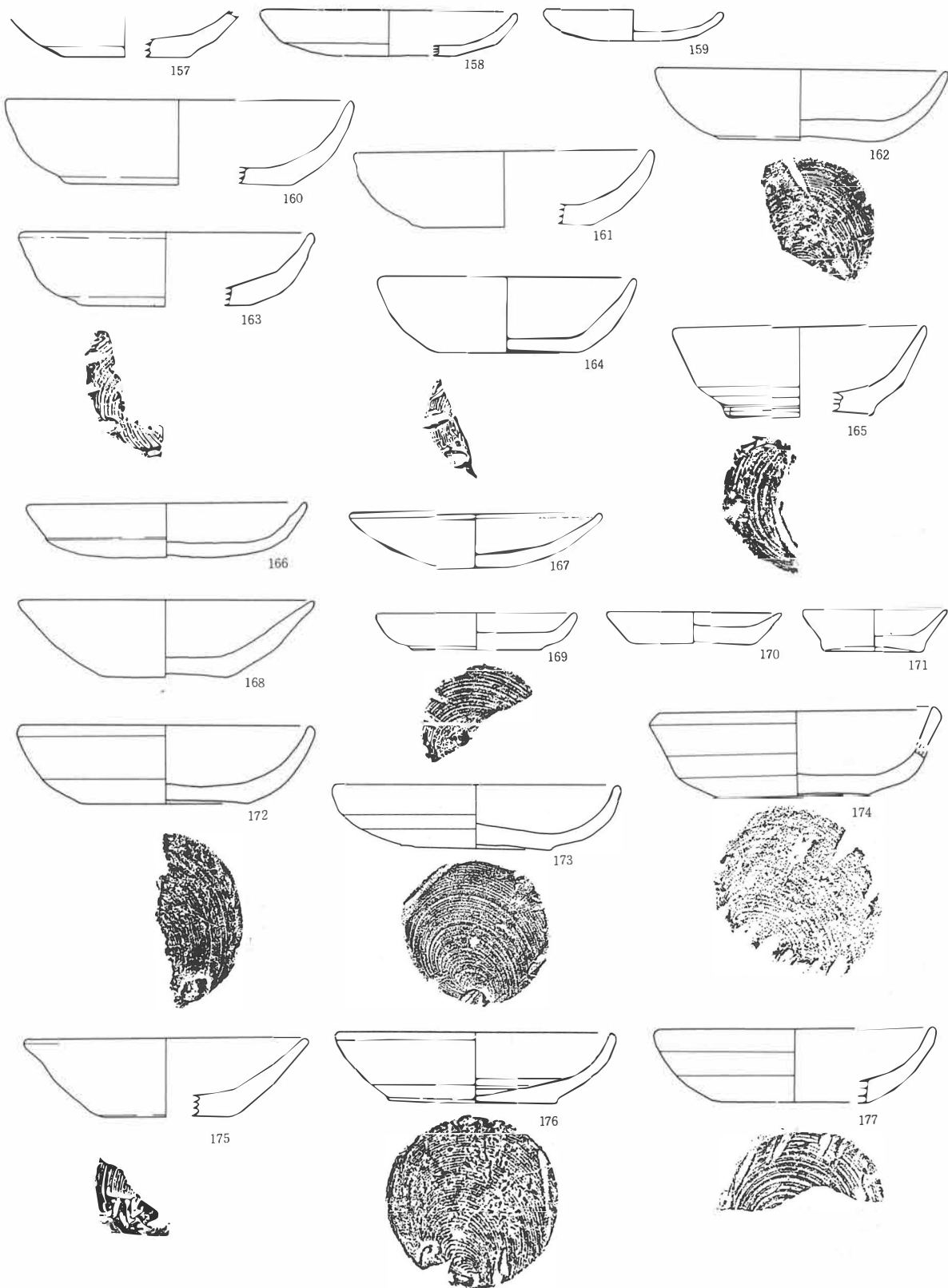
第19図 かわらけ(4)



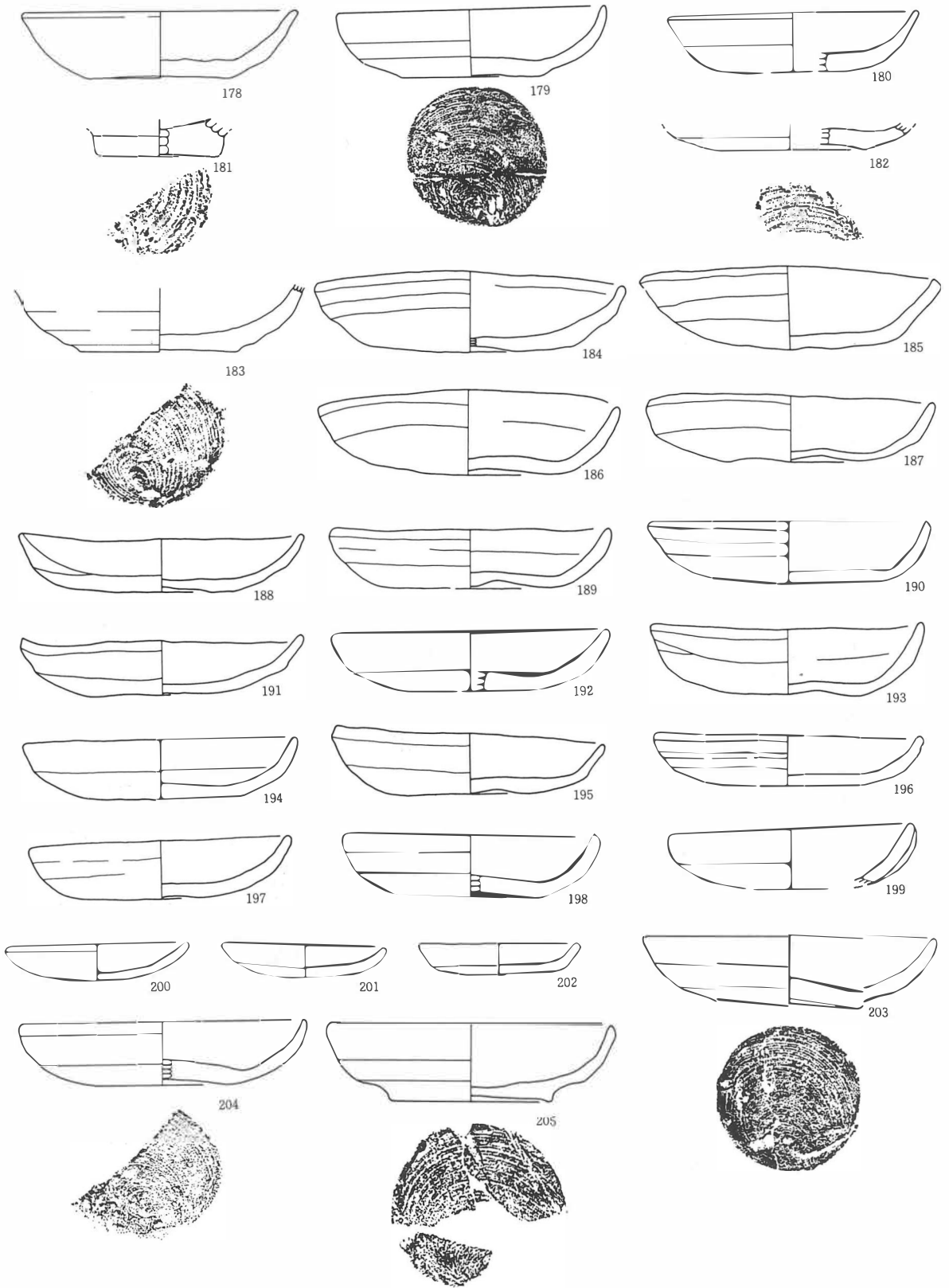
第20図 かわらけ(5)



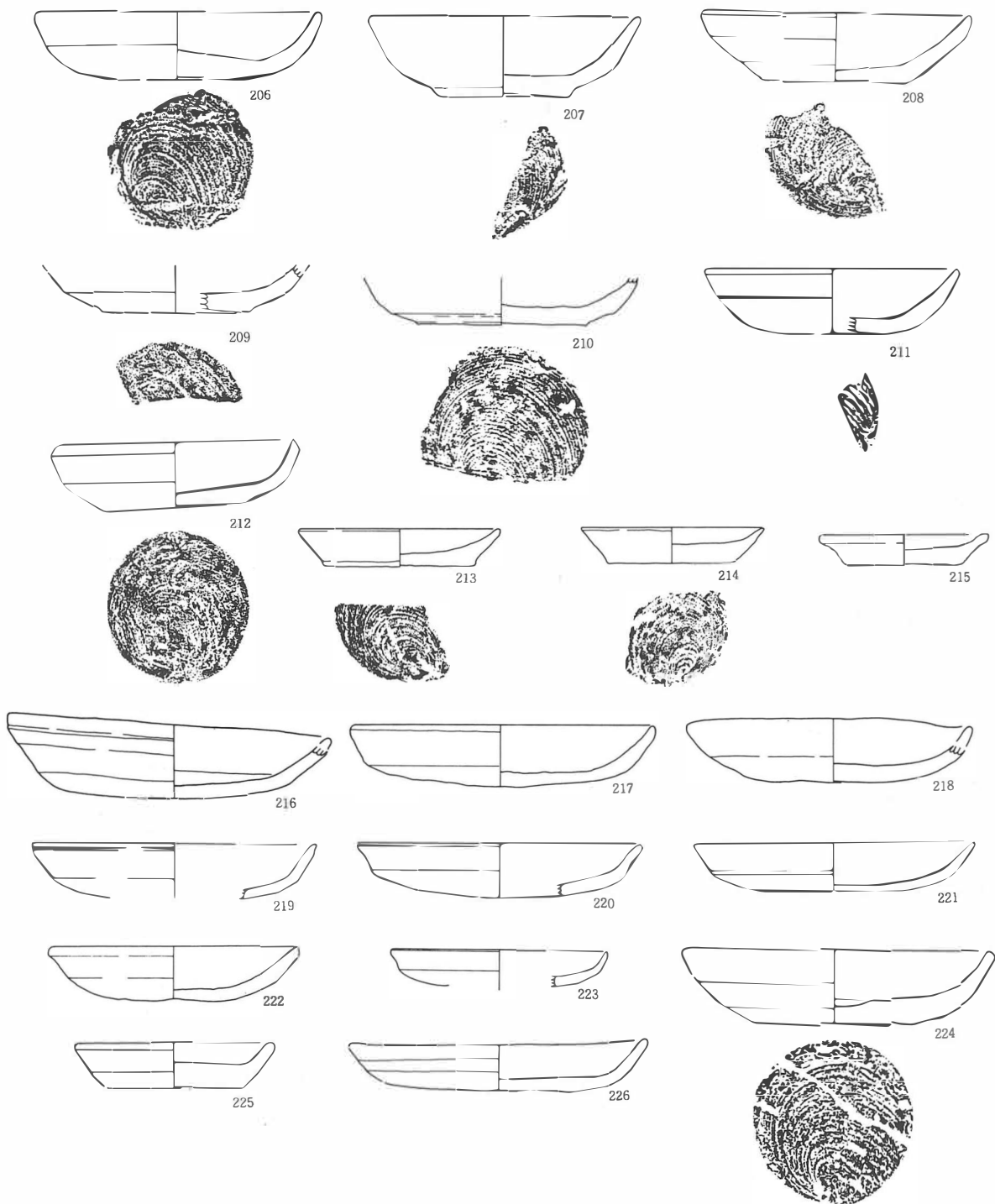
第21図 かわらけ(6)



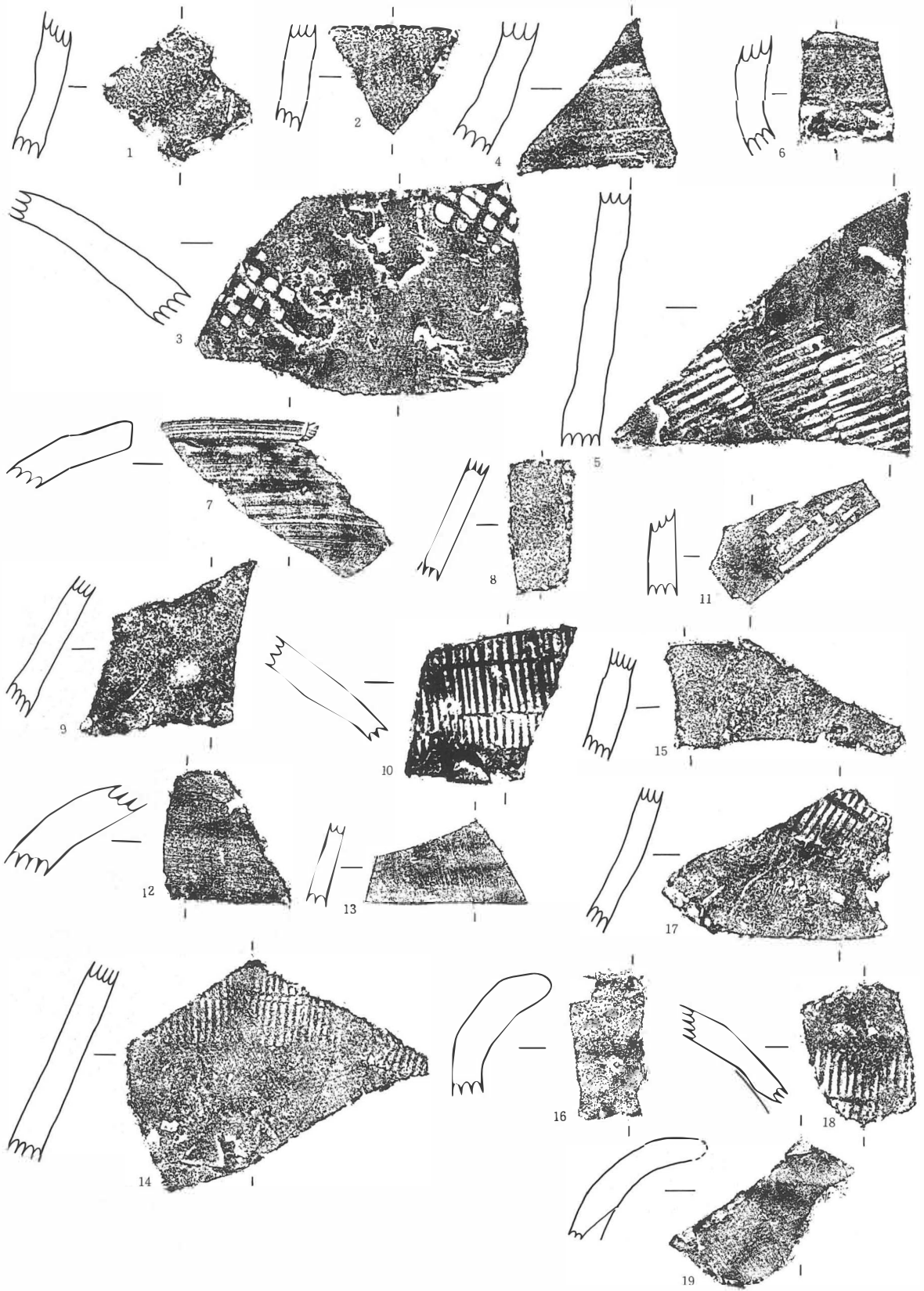
第22図 かわらけ(7)



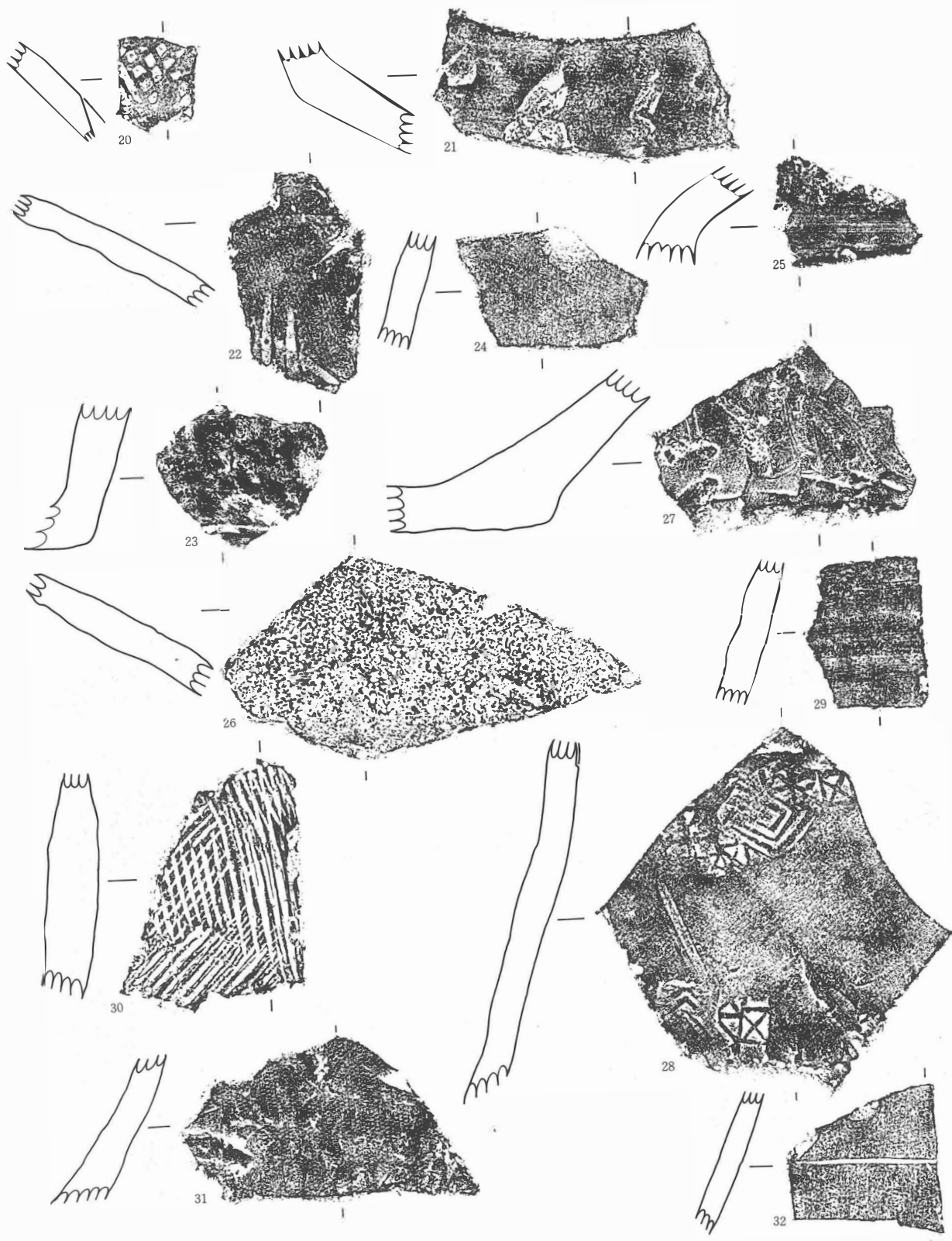
第23図 かわらけ(8)



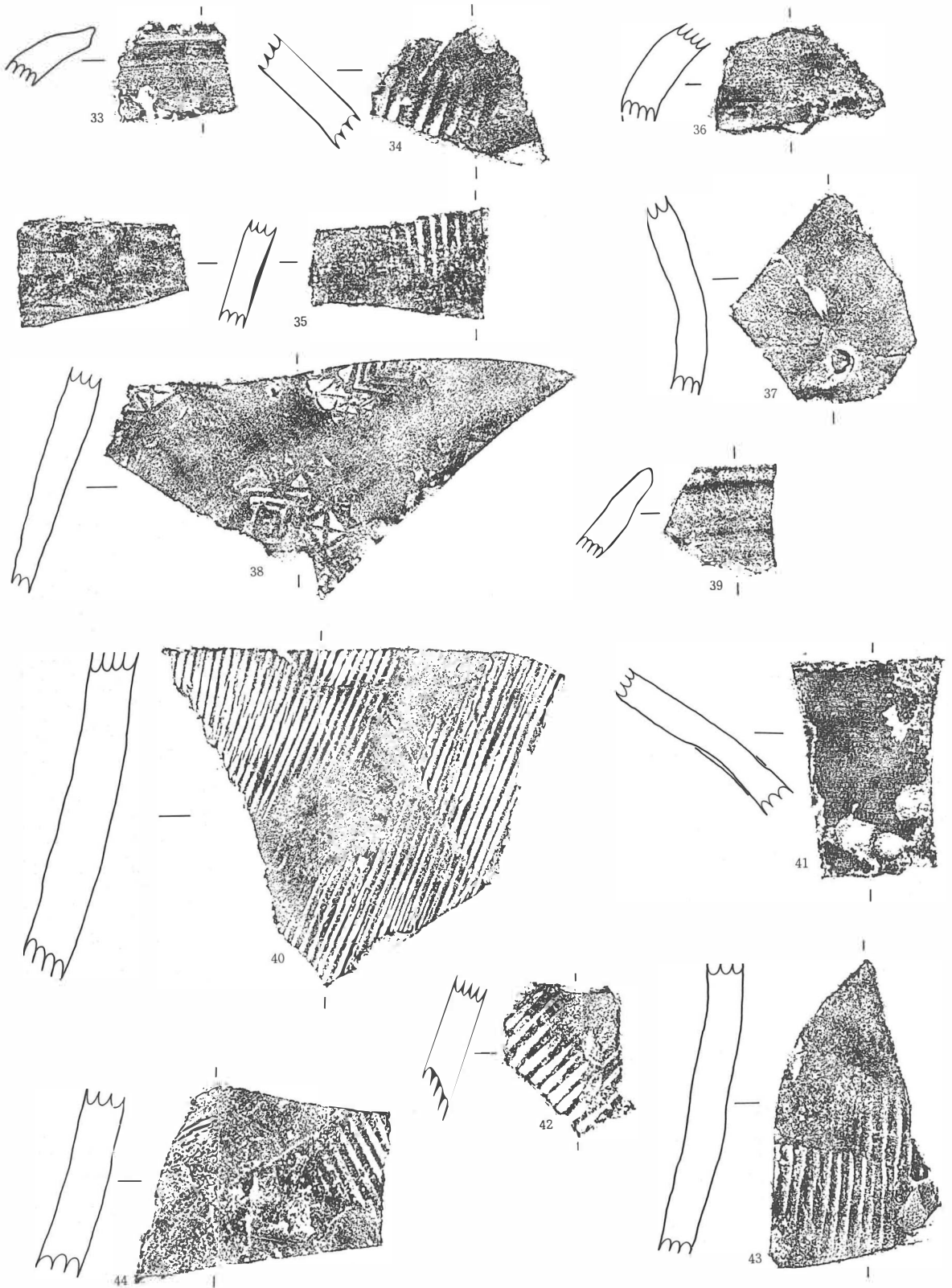
第24図 かわらけ(9)



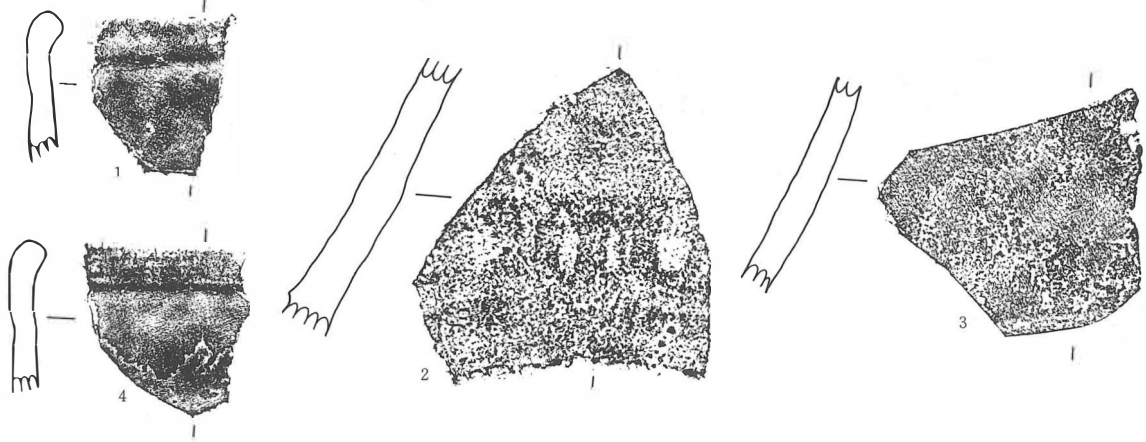
第25図 国産陶器(1)



第26図 国産陶器(2)



第27图 国産陶器(3)



第28図 中国産陶磁器

かわらけ

() は推定

番号	図	写真	遺構・地点	順位	種類	口径	底径	器高	備考	大
1	16		42S B01Na3		ロクロ	(15)	(7.2)	3.1	小石粒多い	大
2	16	14	42S B01Na3		ロクロ	(14.5)		7	摩滅	大
3	16	14	42S B01Na3		ロクロ	(14.4)		6.5	3.4	大
4	16	14	42S B01Na3		ロクロ	(14.4)		8	3.7	摩滅 大
5	16	14	42S B01Na3		ロクロ	14.2	6.5	4.3	小石粒多い	大
6	16		42S B01Na3		ロクロ	(14.2)	(7.2)	3.5	摩滅	大
7	16	14	42S B01Na3		ロクロ	(14)		7	3.8	摩滅 大
8	16		42S B01Na3		ロクロ	13.7	7.7	3.8	楕円形	大
9	16		42S B01Na3		ロクロ	(13.4)	(6.8)	3.4		大
10	16		42S B01Na3		ロクロ	(13)	(6)	3.6	底部摩滅	大
11	16		42S B01Na3		ロクロ		(8.2)		底部のみ	大
12	16		42S B01Na3		ロクロ		(8.2)			大
13	16		42S B01Na3		ロクロ		(8)		底部のみ	大
14	16		42S B01Na3		ロクロ		(8)			大
15	16		42S B01Na3		ロクロ		(8)			大
16	16		42S B01Na3		ロクロ		7.8		底部のみ	大
17	16		42S B01Na3*		ロクロ		(7.4)		小石粒多い	大
18	16		42S B01Na3		ロクロ		(7.2)			大
19	17		42S B01Na3		ロクロ		(6.6)			大
20	17		42S B01Na3		ロクロ		(6.4)		底部のみ	大
21	17	14	42S B01Na3		ロクロ	(9.8)	6.8	2		小
22	17		42S B01Na3		ロクロ	(8.8)		6	1.6	小
23	17	14	42S B01Na3		ロクロ	(8.8)	6.8	1.9		小
24	17		42S B01Na3		ロクロ		8.7	5.8	2.1	小
25	17	14	42S B01Na3		ロクロ		8.6	5.1	1.5	小
26	17		42S B01Na3		ロクロ		(6.4)			小
27	17		42S B01Na3		ロクロ			6		小
28	17		42S B01Na3		手捏ね	(16.2)		3.1		大
29	17		42S B01Na3		手捏ね	(16)		3.1		大
30	17		42S B01Na3		手捏ね	(15.6)		3.1		大
31	17		42S B01Na3		手捏ね	15.4		2.7		大
32	17		42S B01Na3		手捏ね	14.7		3.7		大
33	17	14	42S B01Na3		手捏ね	14.3		3.4		大
34	17	14	42S B01Na3		手捏ね	13.5		3.3		大
35	17	14	42S B01Na3		手捏ね	10		2.1		小
36	17	14	42S B01Na3		手捏ね	9.7		2.1		小
37	17	14	42S B01Na3		手捏ね	9.3		2		小
38	17	14	42S B01Na3		手捏ね	8.9		2		小
39	17	14	42S B01Na6		ロクロ	(8.4)	5.6	1.8		小
40	17	14	42S B01Na6		手捏ね	(11.4)		1.7		小
41	17	14	42S B01Na6		手捏ね	(9.4)		1.9		小
42	17	14	42S B01Na16		手捏ね	(15.8)		3.4		大
43	17	14	42S B01Na22		ロクロ	(14.1)	9	4.1		大
44	17	14	42S B01Na22		ロクロ	(8.8)	(6.8)	1.7		小
45	17	14	42S B01Na22		手捏ね	(10.3)		2		小
46	17	14	42S B01Na29		手捏ね	(13)		2.1		大
47	17	15	42S B01Na31		ロクロ	(14.2)	(6.7)	4.1		大
48	17		42S B01Na31		ロクロ	(13.5)	(8.4)	3.7		大
49	17		42S B01Na31		手捏ね	(15.3)		(2.3)		大
50	17	15	42S B01Na31		手捏ね	(13.8)		2.7		大
51	18	15	42S B01Na31		手捏ね	(11.4)		(3.3)		小
52	18		42S B01Na31		手捏ね	(11.3)		(3.6)		小
53	18		42S B01Na31		手捏ね	(10.4)		2.3		小
54	18		42S B01Na37		ロクロ	(15.3)	(7.2)	3.7		大
55	18		42S B01Na37		ロクロ	(14.2)	(7.6)	4.1	大きく歪む	大
56	18	15	42S B01Na37		ロクロ	(14)	7.4	3.6	砂粒多い	大
57	18		42S B01Na37		ロクロ		(7)			大
58	18		42S B01Na37		ロクロ		(7.3)			大
59	18		42S B01Na37		ロクロ		7.3			大

番号	図	写真	遺構・地点	順位	種類	口径	底径	器高	備考	大
60	18		42S B01Na37		ロクロ		(7.4)			大
61	18		42S B01Na37		ロクロ		7.5		底部のみ	大
62	18		42S B01Na37		ロクロ		(7.6)		底部のみ	大
63	18		42S B01Na37		ロクロ		(8)			大
64	18		42S B01Na37		ロクロ	(9.6)	6.4	1.7		小
65	18		42S B01Na37		ロクロ	(9.6)	6.6	1.9		小
66	18		42S B01Na37		ロクロ	(9.4)	(5.7)	1.7		小
67	18	15	42S B01Na37		ロクロ	9.2	6.5	1.8		小
68	18		42S B01Na37		ロクロ	9.1	6.5	1.8	摩滅	小
69	18		42S B01Na37		ロクロ	(9)	(5.8)	1.5		小
70	18		42S B01Na37		ロクロ	8.8	6	1.8	摩滅	小
71	18		42S B01Na37		ロクロ	8.7	6.2	1.7	摩滅	小
72	18		42S B01Na37		ロクロ	(8.5)	(5.8)	1.5		小
73	18		42S B01Na37		ロクロ	(8.1)	6	1.6		小
74	18		42S B01Na37		ロクロ		(6.5)			小
75	19		42S B01Na37		手捏ね	(15.4)		2.9		大
76	19		42S B01Na37		手捏ね	(15)		2.8		大
77	19		42S B01Na37		手捏ね	(15)		2.6		大
78	19		42S B01Na37		手捏ね	(14.6)		3.2		大
79	19	15	42S B01Na37		手捏ね	(14.5)		2.9	硬い焼成	大
80	19		42S B01Na37		手捏ね	(11)		1.9		小
81	19		42S B01Na37		手捏ね	(10)		2		小
82	19		42S B01Na37		手捏ね	(10)		2.1		小
83	19		42S B01Na37		手捏ね	(9.6)		2		小
84	19		42S B01Na37		手捏ね	(9.4)		1.6	一部剥落	小
85	19		42S B01Na37		手捏ね	(9)		1		小
86	19		42S B01Na37		手捏ね	(8.8)		1.1		小
87	19	15	42S B01Na41		手捏ね	(15.4)		2.5		大
88	19		42S B01Na41		手捏ね	(11.9)		(2.3)		小
89	19		42S B01Na41		手捏ね	(11.2)		1.9		小
90	19	15	42S B01Na41		手捏ね	(8.3)		1.5		小
91	19	15	42S B01Na52		手捏ね	(14)				大
92	19	15	42S B01Na52		手捏ね	(13.4)		(2.5)		大
93	19	15	42S B01		ロクロ	(14.4)	(7.1)		66-84	大
94	19	15	42S B01		ロクロ	(13.6)	(7.2)	4.9	〃	大
95	19	15	42S B01		ロクロ	(9.4)	(6.2)	1.9	〃	小
96	19	15	42S B01		ロクロ	9.1	6	1.8	〃	小
97	19	15	42S B01		ロクロ	(14.5)	(8.1)	4.1		大
98	19	15	42S B01		ロクロ	(13.7)	6.5	4		大
99	19	15	42S B01		ロクロ	(9.1)	(7.3)	1.3		小
100	19	15	42S B01		ロクロ	7.8	5.7	1.3		小
101	19	15	42S B01		手捏ね	(11.9)		2.6		小
102	19		42S B01		手捏ね	(11)		3.2		小
103	19	15	42S B01		手捏ね	(9.3)		1.7		小
104	19		42S B01		手捏ね	(8.6)	(4.7)	2	手捏ね?	小
105	19		42S B01		砂削	ロクロ	(15.3)	(6.4)	3.4	大
106	19	16	42S B01		ロクロ	(15.1)	(9)	3.8		大
107	20	16	42S B01		ロクロ	(14.4)	(8.2)	3.6	穿孔品	大
108	20	16	42S B01		ロクロ	(13.1)	(6.8)	4		大
109	20		42S B01	5	ロクロ	(13)	(6.9)	4		大
110	20		42S B01		ロクロ	(15)	7.3	3.1	67-84	大
111	20		42S B01		ロクロ	(14.8)	(8.8)	3.6	67-84	大
112	20		42S B01		ロクロ	(13.5)	(8.5)	3.5	67-84	大
113	20		42S B01		ロクロ		(6)			大
114	20		42S B01		ロクロ		(6.6)		67-84, 摩滅	大
115	20		42S B01		ロクロ		(6.6)		底部摩滅	大
116	20	16	42S B01		ロクロ	10	6	2.6		小
117	20		42S B01		ロクロ	(9.3)	(6.4)	1.9	底部摩滅	小
118	20		42S B01		ロクロ	(10.1)	(7.3)	1.6	67-84	小

かわらけ

() は推定

番号	回	写真	遺構・地点	順位	種類	口径	底径	器高	備考	大
119	20		42S D01		手捏ね	(17.6)		3.8		大
120	20		42S D01		手捏ね	(15.2)		2.7		大
121	20		42S D01		手捏ね	(13.6)		(3.1)		大
122	20		42S D01		手捏ね	(14.6)		2.5	67-84	大
123	20		42S D01		手捏ね	(9.8)		1.7		小
124	20		42S D09		手捏ね	(10.1)				大
125	20		42S D09		手捏ね	(10.5)		(1.7)		小
126	20		42S D10		口クロ	(15.4)	(8.4)	4		大
127	20		42S D10		手捏ね	(10.9)		2.8		小
128	20		42S D11		口クロ		7.2			大
129	20		42S D11		手捏ね	(6.9)		(1.8)		小
130	20		42S D13		口クロ	(12.9)	(5.9)	3.1		大
131	20		42S D13		口クロ		(5.7)			大
132	20		42S E01		口クロ	(13.4)	(5.2)	4		大
133	21		42S E01		手捏ね	(14.8)				大
134	21		42S E01		手捏ね	(9.7)		(1.9)		小
135	21	16	42S K01	底	口クロ	14.1	7.5	4.5		大
136	21		42S K01		口クロ	(13.2)		(3.3)		大
137	21	16	42S K01	3層?	口クロ	9	4.8	2		小
138	21	16	42S K01	3層	口クロ	9	6.8	1.5		小
139	21		42S K01	底	口クロ	8.7	5.7	2.3		小
140	21		42S K01		口クロ	(7.8)	(5.4)	1.7		小
141	21		42S K01	上層	口クロ		5.5		底部のみ	小
142	21	16	42S K01	底	手捏ね	(15)		3.5		大
143	21	16	42S K01	上層	柱高			4.5		
144	21	16	42S K01		柱高			6.4		
145	21		42S K02		口クロ	15.1	(6.6)	3.7		大
146	21		42S K02		口クロ	14.9	7.2	4		大
147	21		42S K02		口クロ	14.6	7.2	3.8		大
148	21		42S K02		口クロ	(14.3)			口クロ?	大
149	21	16	42S K02		口クロ	(14)	7.1	3.7		大
150	21		42S K02		口クロ	(13.4)	(6.7)	3.6		大
151	21		42S K02		口クロ	(12.6)	(5.2)	3.4	口クロ?	大
152	21		42S K02		口クロ		7			大
153	21		42S K02		口クロ		(7.8)			大
154	21		42S K02		口クロ	(9.6)	(6.6)	(2.1)		小
155	21		42S K02		口クロ	(9)	(6)	(2.2)		小
156	21		42S K02		口クロ	(8.4)	(5.5)	(1.9)		小
157	22		42S K02		口クロ		(6.2)			小
158	22		42S K02		手捏ね	(12.8)		(2.3)		大
159	22		42S K02		手捏ね	(8.7)		1.6		小
160	22		42S K09		口クロ	(17.1)	(11.4)	4.2	底部摩耗	大
161	22		42S K09		口クロ	(14.9)	(8.1)	3.8		大
162	22		42S K09		口クロ	(14.5)	(8.3)	3.5		大
163	22		42S K09		口クロ	(14.3)	(8.7)	3.7		大
164	22		42S K09		口クロ	(12.7)	(7.5)	3.5		大
165	22		42S K09		口クロ	(12.6)	(7.2)	4.5		大
166	22		42S K09		手捏ね	(13.8)		2.7		大
167	22		42S K09		手捏ね	(12.5)		2.7		大
168	22		42S K10	3	口クロ	(14.7)	(6.3)	3.8	62-80	大
169	22		42S K10	3	口クロ	(9.9)	6.5	1.9	62-80	小
170	22	16	42S K10	3	口クロ	8.7	6.1	1.5	62-80	小
171	22	16	42S K10	3	口クロ	7.1	5	2.1	62-80	小
172	22	16	整地層	下位	口クロ	(14.8)	(8.2)	3.8		大

番号	回	写真	遺構・地点	順位	種類	口径	底径	器高	備考	大
173	22		整地層		口クロ	14.3	7	3.2		大
174	22	16	整地層		口クロ	(14.3)	7.6	4.2		大
175	22		整地層		口クロ	(13.9)	(6.2)	3.9		大
176	22		整地層		口クロ	13.9	8.2	3.4		大
177	22	16	整地層		口クロ	13.8	7.5	3.6		大
178	23	17	整地層		口クロ	13.7	7.1	3.4	63-80	大
179	23		整地層		口クロ	13.2	7	3.3		大
180	23	17	整地層		口クロ	(12.4)	(5.8)	3	底部摩耗	大
181	23		整地層		口クロ		(6)		底部のみ	大
182	23		整地層		口クロ		(7.4)			大
183	23		整地層		口クロ		7.9			大
184	23		整地層		手捏ね	(15.4)		3.6		大
185	23		整地層		手捏ね	(15)		(3.7)		大
186	23	17	整地層		手捏ね	15		3.6	摩滅・剥落	大
187	23		整地層		手捏ね	14.3		3	摩滅・剥落	大
188	23		整地層		手捏ね	14.2		3		大
189	23		整地層		手捏ね	(14)		2.9		大
190	23	17	整地層		手捏ね	14		3.2		大
191	23		整地層		手捏ね	14		2.7		大
192	23	17	整地層		手捏ね	(13.8)		2.7		大
193	23	17	整地層		手捏ね	13.6		3.5		大
194	23	17	整地層		手捏ね	13.6		3		大
195	23		整地層	上面	手捏ね	13.6		3.5		大
196	23		整地層		手捏ね	(13.4)		(2.6)		大
197	23		整地層		手捏ね	(13)		2.9		大
198	23		整地層		手捏ね	(12.8)		3.1		大
199	23		整地層		手捏ね	(12.5)		3		大
200	23	17	整地層		手捏ね	9		1.9		小
201	23	17	整地層		手捏ね	8.1		1.8	もろい	小
202	23		整地層		手捏ね	(8)		1.6		小
203	23	17	土器層		口クロ	14.4	7	3.4		大
204	23		土器層		口クロ	(14)	(6.6)	(3.1)		大
205	23		土器層		口クロ	(13.9)	(7.8)	(3.8)		大
206	24		土器層		口クロ	(13.6)	6.5	3.1		大
207	24		土器層		口クロ	(12.8)	(6.3)	3.8		大
208	24		土器層		口クロ	(12.6)	(6.7)	3.2		大
209	24		土器層		口クロ		(6.9)			大
210	24		土器層		口クロ		8			大
211	24		土器層		口クロ	(11.7)	(4)	(3.1)		小
212	24	17	土器層		口クロ	11.2	6.7	3.1		小
213	24		土器層		口クロ	(9.4)	(7.1)	1.8		小
214	24		土器層		口クロ	(8.6)	6	1.6		小
215	24		土器層		口クロ	8	5.6	1.5		小
216	24	17	土器層		手捏ね	(15.3)		3.4		大
217	24		土器層		手捏ね	(14.4)		2.8		大
218	24		土器層		手捏ね	13.9		(2.7)		大
219	24		土器層		手捏ね	(13.5)		(2.7)		大
220	24		土器層		手捏ね	(13.4)		2.5		大
221	24		土器層		手捏ね	(13.2)		2.4		大
222	24		土器層		手捏ね	(11.6)		2.6		小
223	24		土器層		手捏ね	(10.1)		(1.8)		小
224	24	17	64-82	II	口クロ	(14.8)	7.5	3.5		大
225	24		65-80~81		口クロ	(9.5)	2.1	6.5		小
226	24		65-81	III	手捏ね	14		2.3		大

国産陶器

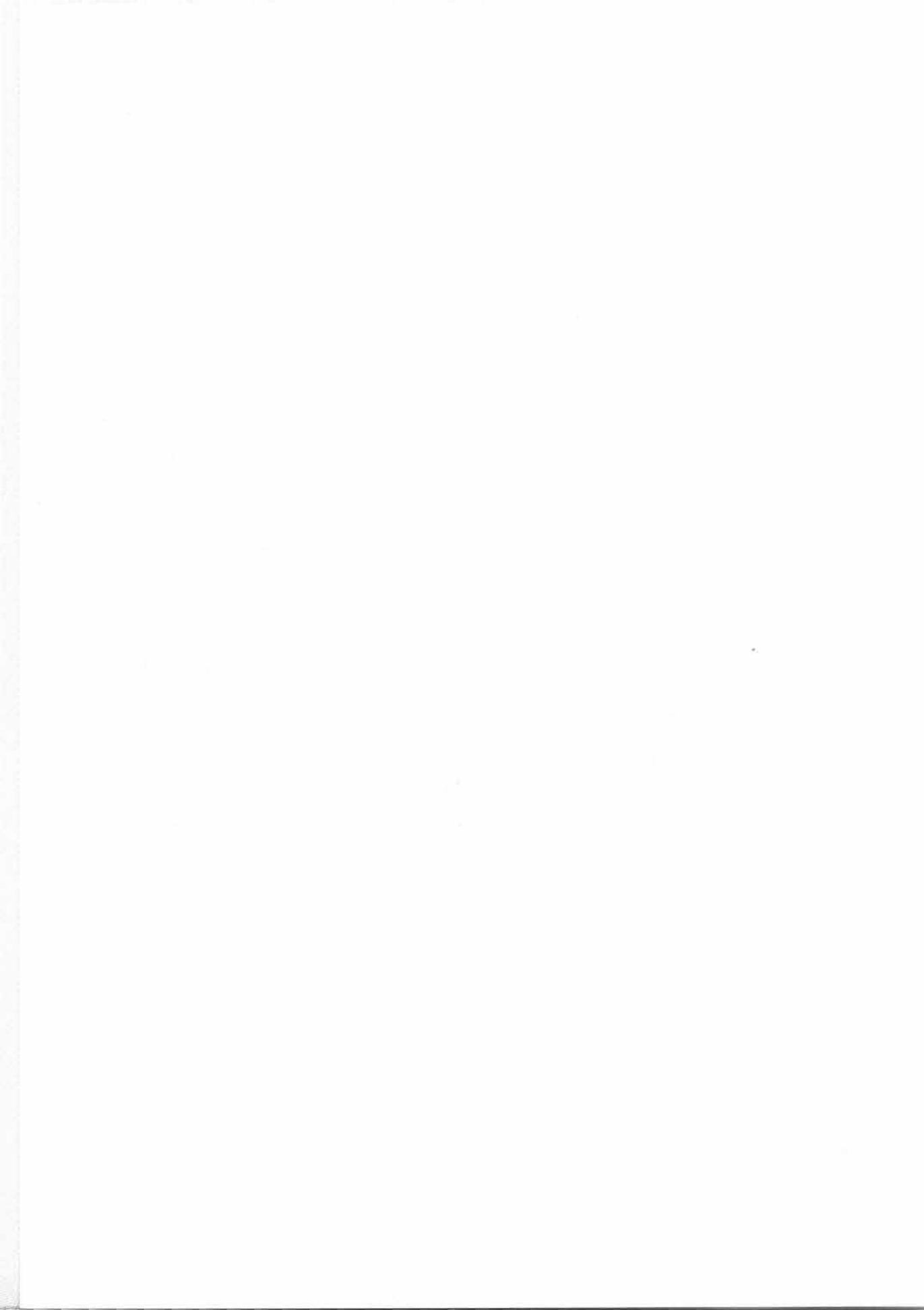
番号	回	写真	地点・遺構	種類	器種	備考
1	25	19	42S D02	常滑	甕	埋土中
2	25	19	42S D02	常滑	甕	埋土中
3	25	19	42S D11	瀬美	甕	65-79
4	25	19	42S K01	瀬美	壺	74-99-100
5	25	19	42S K01	瀬美	壺	埋土1層
6	25	19	整地層	常滑	甕	60-66-80
7	25	19	整地層	常滑	甕	65-66-80
8	25	19	藤群	常滑	甕	63-80
9	25	19	藤群	常滑	甕	63-80
10	25	19	藤群	常滑	甕	64-80
11	25	20	藤群	瀬美	甕	63-80
12	25	20	藤群	瀬美	甕	64-80
13	25	20	藤群	須恵器	?	64-80
14	25	20	表土	常滑	?	61-80~66-81
15	25	20	表土	常滑	壺?	65-81-82
16	25	20	表土	常滑	甕	67-81-82
17	25	20	表土	常滑	甕	66-67-82
18	25	20	表土	常滑	甕	63-80
19	25	20	表土	常滑	甕	67-81-82
20	26	20	表土	瀬美	甕	63-80-81
21	26	21	表土	瀬美	甕	65-81-82
22	26	21	表土	瀬美	甕	66-67-82

番号	回	写真	地点・遺構	種類	器種	備考
23	26	21	表土	瀬美	甕	65-81-82
24	26	21	表土	瀬美	甕	63-80
25	26	21	表土	瀬美	甕	63-80
26	26	21	表土	瀬美	甕	61-80~66-81
27	26	21	表土	瀬美	甕	61-80~66-81
28	26	22	表土	瀬美	甕	61-80~66-81
29	26	22	表土	須恵器系	壺	63-80
30	26	22	表土	須恵器系?	壺	63-80-81
31	26	22	表土-11層	瀬美	甕	64-83
32	26	22	11層	常滑	二筋壺	12C系(半線)
33	27	22	11層	常滑	甕	64-84
34	27	22	11層	常滑	甕	64-84
35	27	22	11層	常滑	甕	63-82
36	27	22	11層	常滑	甕	63-82
37	27	23	表土直下	瀬美	甕	67-81-82
38	27	23	11層	瀬美?	甕	65-84
39	27	23	IV層上面	常滑	鉢	65-82
40	27	23	IV層上面	須恵器系	壺	64-82
41	27	23		常滑	甕	67-80-81
42	27	23	?	瀬美	甕	64-79
43	27	24	不明	瀬美	甕	60-80-81
44	27	24	不明	瀬美	甕	60-80-81

中国陶磁

番号	回	写真	地点・遺構	種類	器種	備考
1	28	24	42S D11	中国産陶器	四耳壺	65-79
2	28	24	11層	中国産陶器	壺	65-81-82 黄釉
3	28	24	11層	白磁	四耳壺	11系63-82
4	28	24	表土	中国産陶器	四耳壺	67-81-82

写 真 图 版





第1図版 A地点空中写真(大型建物を中心とする)

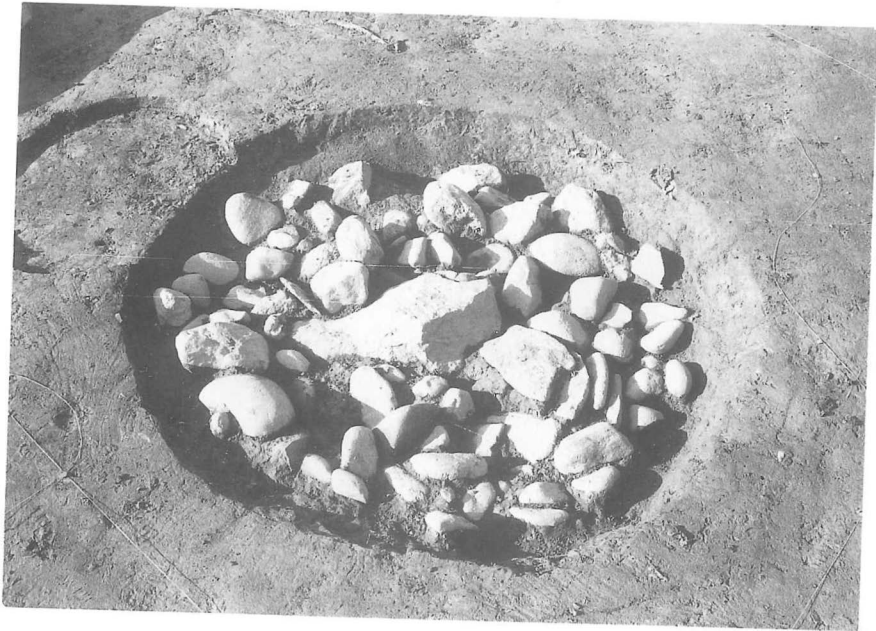


南半部（東から）

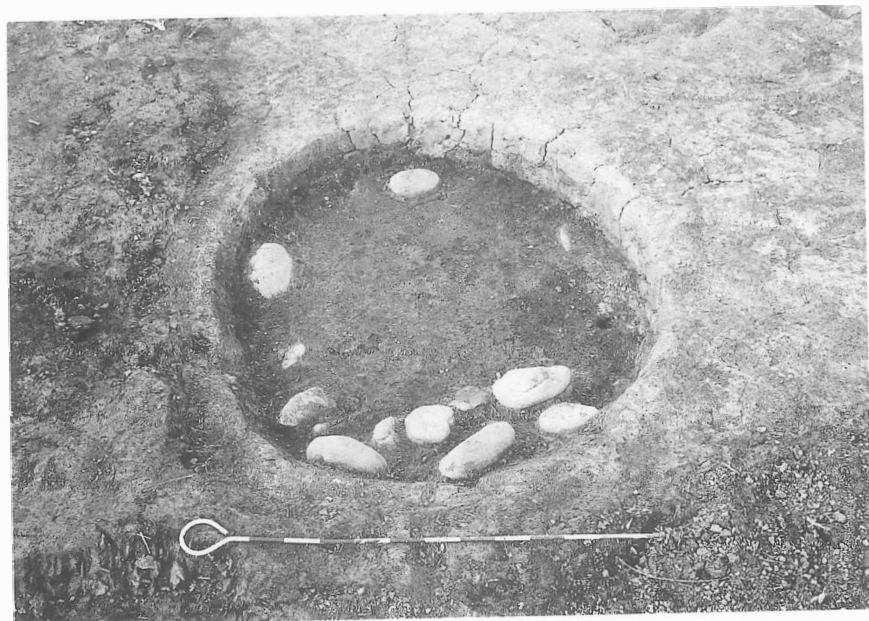


北半部
（東から）

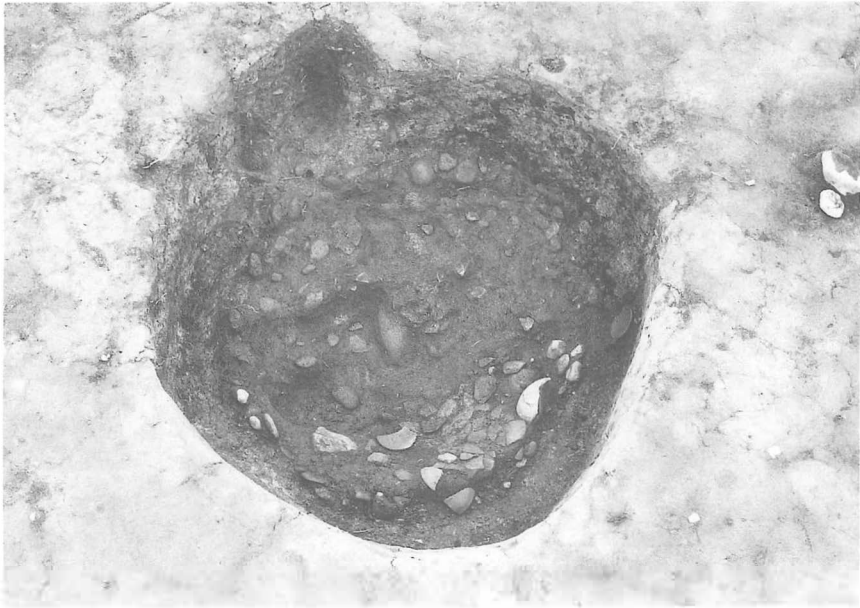
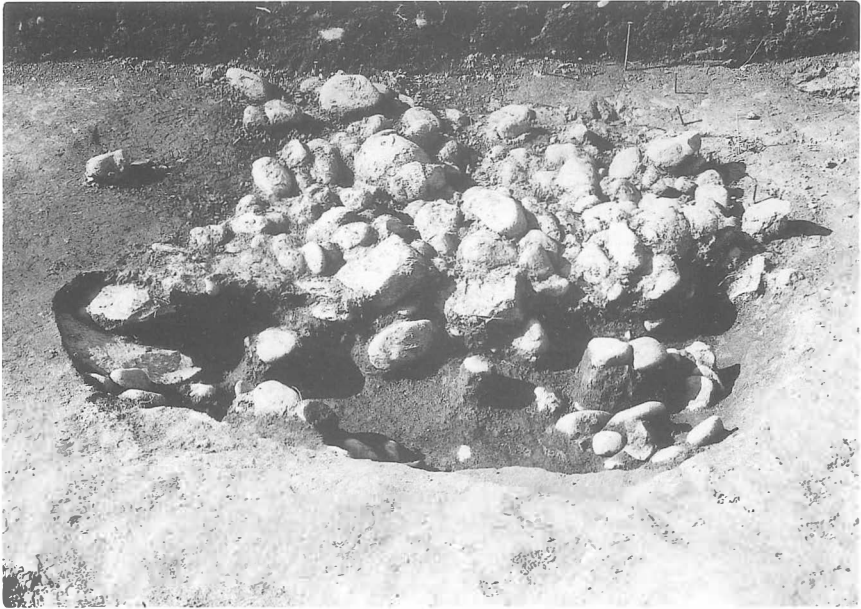
第2図版 A地点42S B01検出状況



第3図版 42S B01柱穴(I)



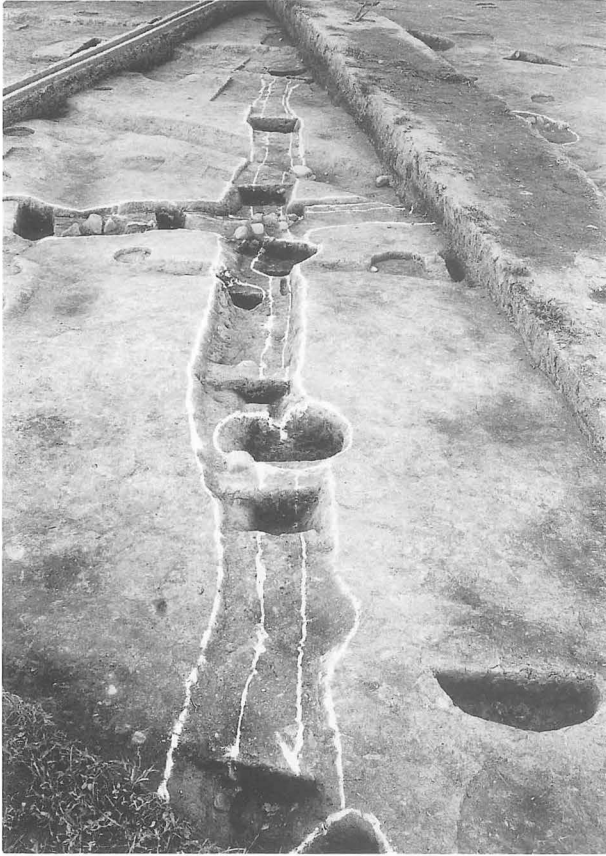
第4図版 42S B 01柱穴(2)



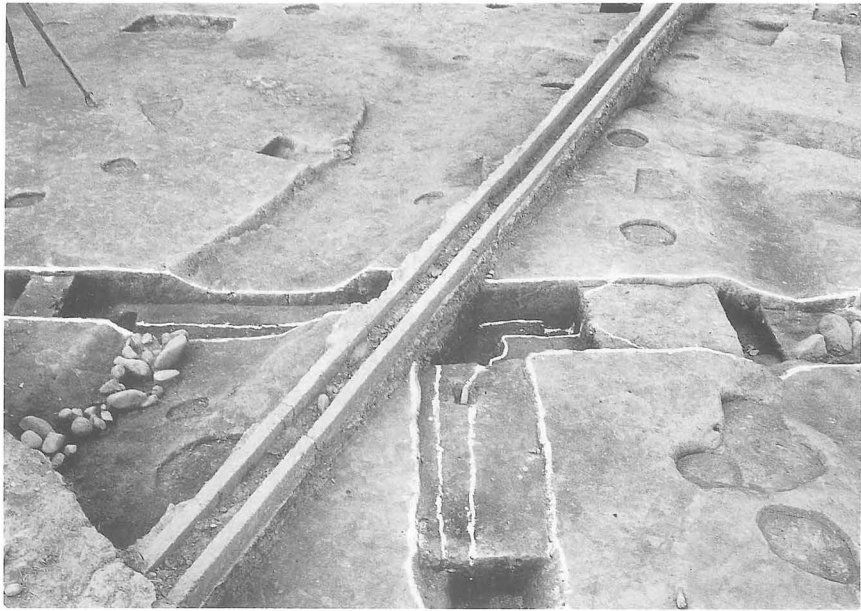
第5図版 井戸状遺構 (42S E01) (上)、土壌 (42S K02) (下)



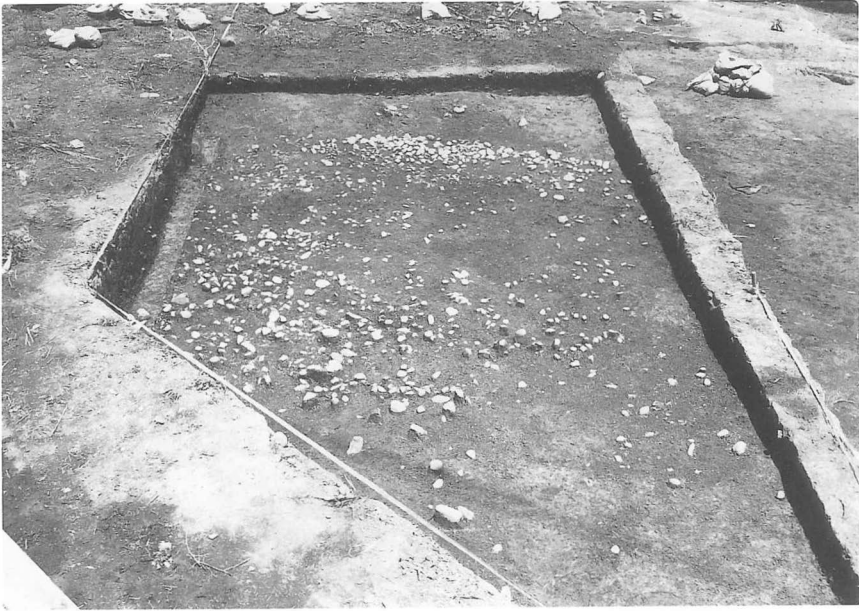
第 6 図版 土壙 (42 S K 02) 調査状況



第7図版 堀跡検出状況(1)



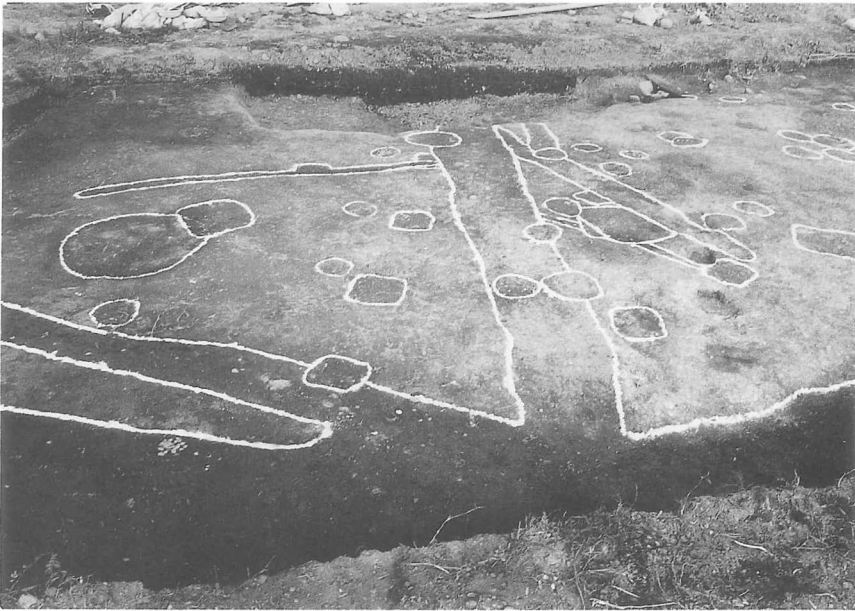
第 8 図版 塀状遺構検出状況(2)



第9図版 A地点礫群及び土器溜り



第10図版 土器溜り、かわらけ出土状況



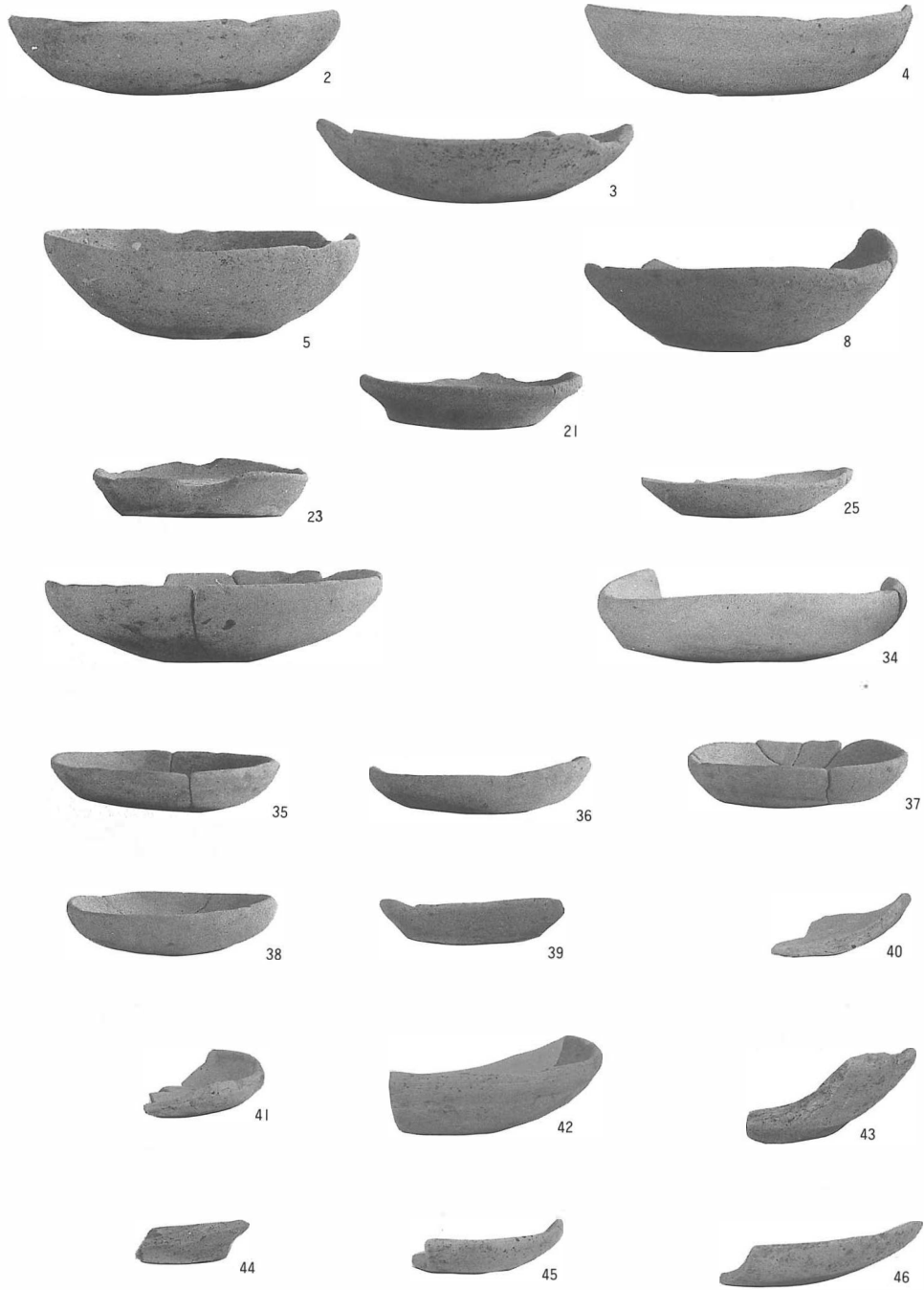
第II図版 A地点大溝(42S D01)及び断面観察トレンチ



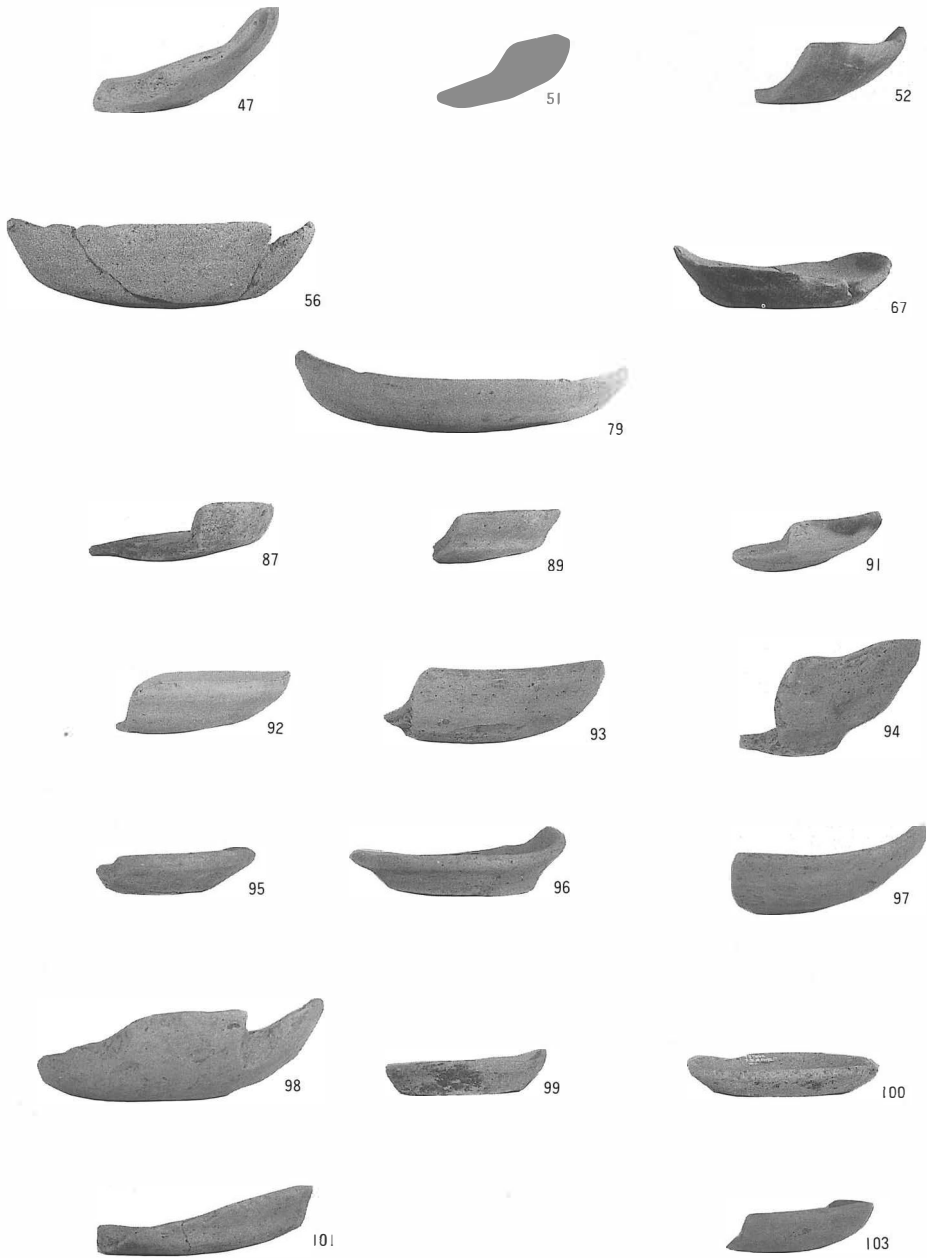
第12図版 A地点北部グリッド・遺構検出状況

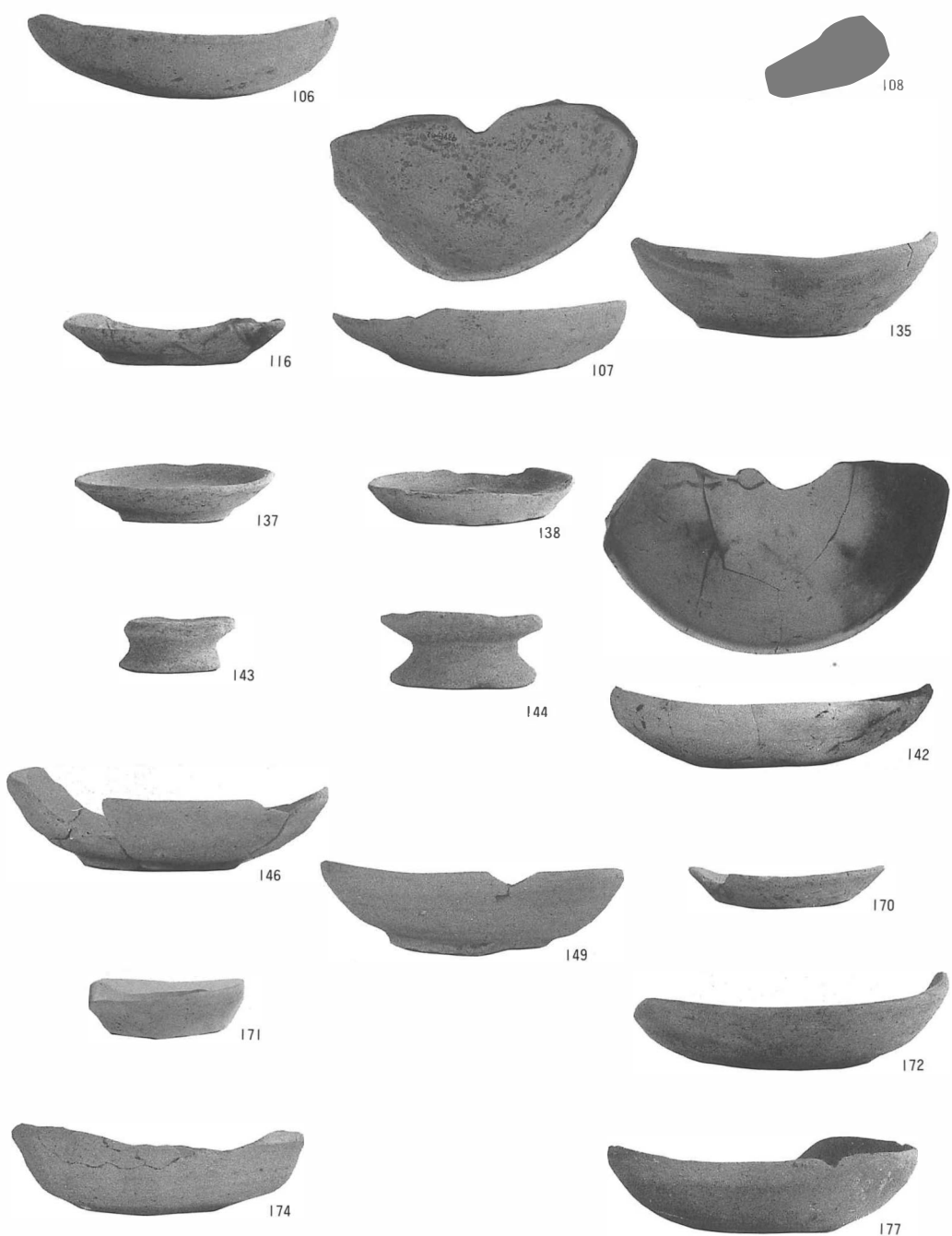


第13図版 B地点(42S A27及び42S K01遺物出土状況)



第14図版 かわらけ(1)





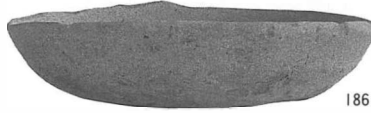
第16図版 かわらけ(3)



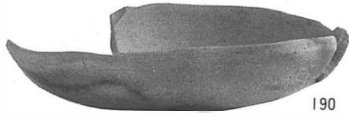
178



180



186



190



192



193



194



200



201



203



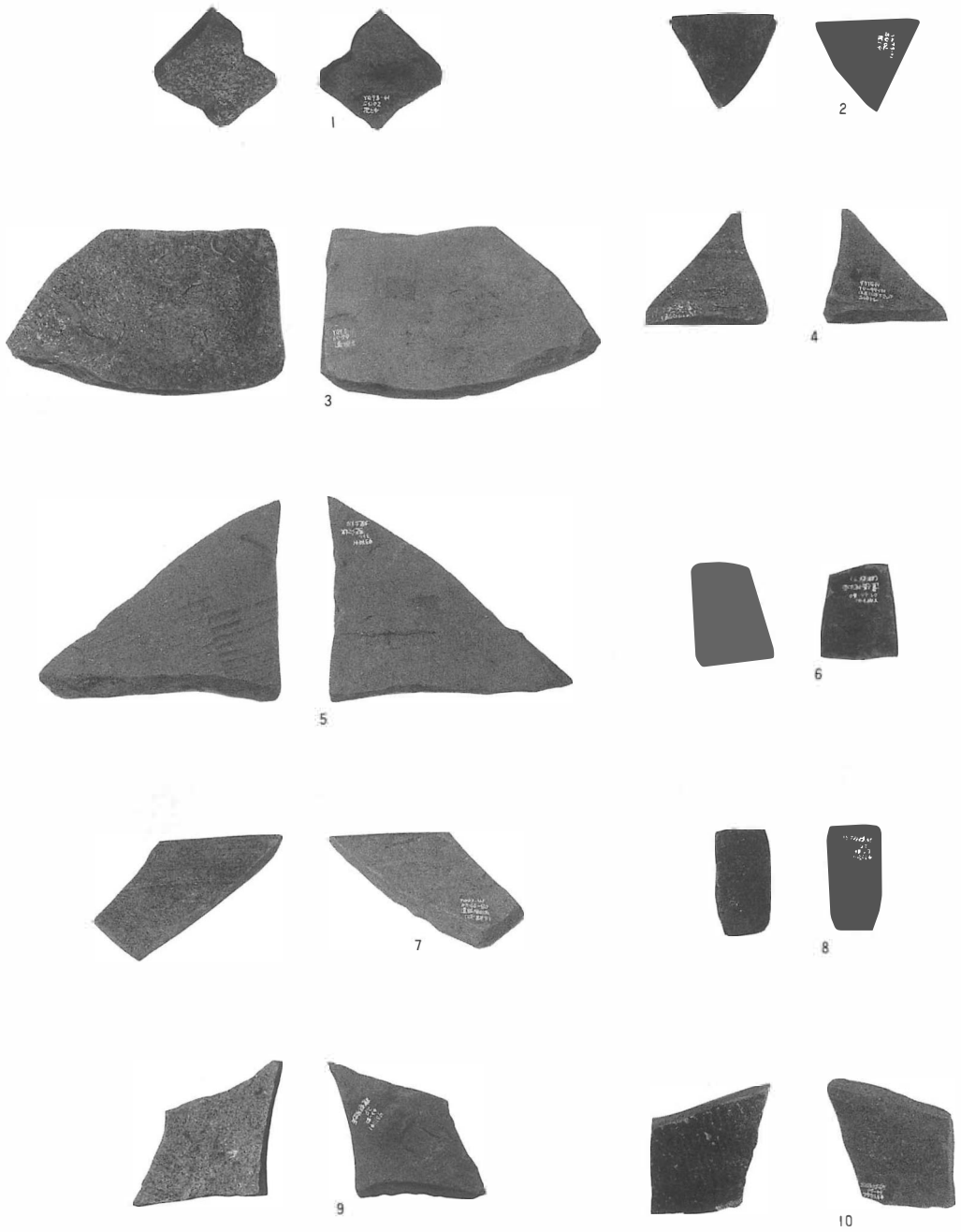
212



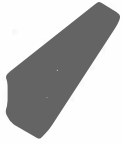
216



224



第18図版 国産陶器(1)



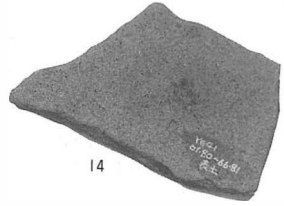
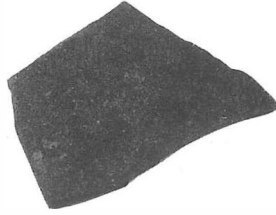
11



12



13



14



15



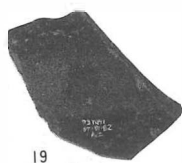
16



17



18



19



20



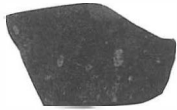
21



22



23



24



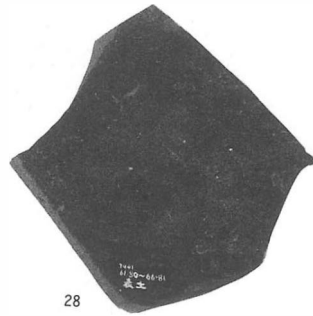
25



26



27



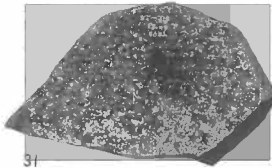
28



29



30



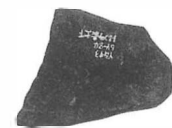
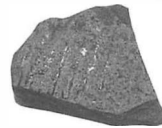
31



32



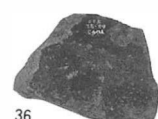
33



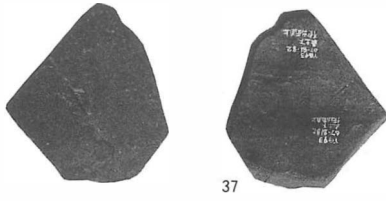
34



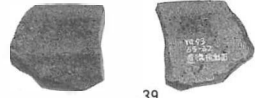
35



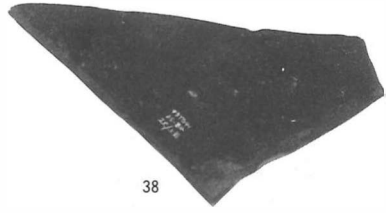
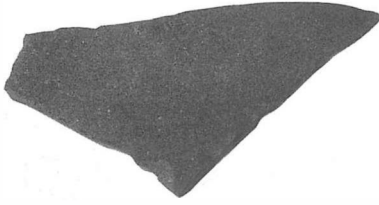
36



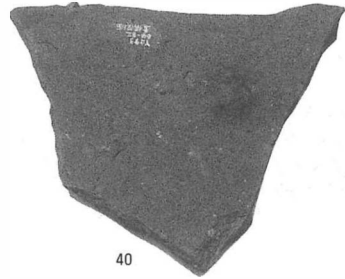
37



39



38



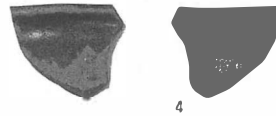
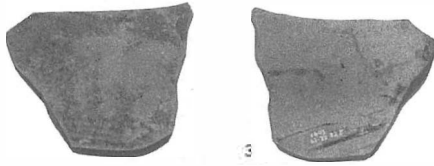
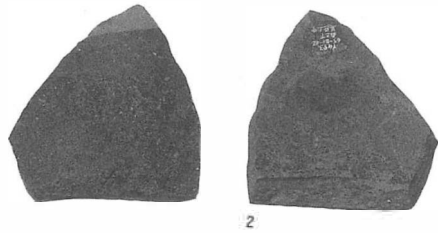
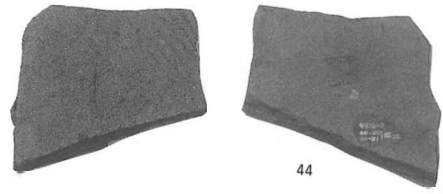
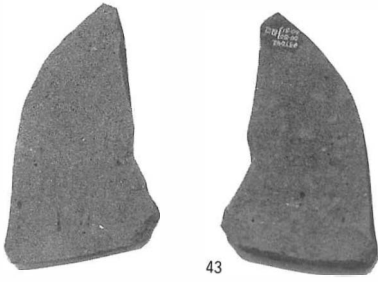
40



41



42



第23図版 国産陶器・中国陶磁

岩手県文化財調査報告 第96集

平泉遺跡群範囲確認調査報告書

—— 第42次柳之御所跡発掘調査報告書 ——

平成6年3月

発行 岩手県教育委員会
岩手県盛岡市内丸10-1
編集 岩手県教育委員会事務局文化課
印刷 (株)杜陵印刷
盛岡市みたけ二丁目22-50

